

## 高岡麓遺跡第28・31・32地点

飯田地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2012

宮崎市教育委員会

# 高岡麓遺跡第28・31・32地点

飯田地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

宮崎市教育委員会



## 序 文

本書は、高岡町飯田地区の区画整理事業に伴い平成20、21年度に実施された、高岡麓遺跡第28・31・32地点の発掘調査報告書です。

高岡麓遺跡のある高岡町域は多くの遺跡が確認されている地域です。現在の高岡町市街地となっている一帯は、近世に天ヶ城が整備され、薩摩藩の閑外四ヶ郷のうち最も主要な位置を占めていた高岡郷の中心地で、天ヶ城の麓には郷士達が薩摩藩各地から集住し高岡郷を治めた地頭の仮屋などが置かれました。現在でも、その当時の面影を残す町並みや路地が残されており、大変風情あふれる地区となっています。

今回調査をおこなった高岡麓遺跡の第28・31・32地点では、高岡町市街地一帯が高岡郷と言われていた近世に、そこに生きた人々の生活の痕跡である遺構や、遺物が多く確認されました。本書は、この調査成果をまとめたものであり、宮崎の歴史を考える上で、高岡麓遺跡の重要性が改めて明らかになったものと思います。

近代化に伴った開発の波は、この高岡麓遺跡のある一帯にも及んでいます。しかし、地域の力、魅力を発見、発信していくには、連續と積み重ねられてきた歴史や、残された歴史の面影を守り、伝えていくことも大変重要です。宮崎市教育委員会では、そうした活動をおこないながら、今まで受け継がれた私たちの街の歴史というものを次世代へと繋いでいきたいと考えています。

最後になりますが、本書が市民の皆様に広く活用され、宮崎の歴史、文化についてのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

宮崎市教育委員会

教育長 二見俊一

## 例　言

- 1 本書は、宮崎市教育委員会が平成20、21年度に実施した高岡麓遺跡第28・31・32地点の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は第28地点が平成20年6月18日から平成20年8月21日まで、第31地点が平成20年7月24日から平成20年8月29日まで、第32地点が平成21年6月18日から平成21年8月8日までの期間実施した。整理作業は平成20年12月19日から平成21年1月14日、平成22年9月21日から平成22年11月19日、及び平成23年5月9日から平成23年6月20日の期間実施した。
- 3 調査組織

調査主体　宮崎市教育委員会

現地調査

(平成20年度)

総　括　文化財課長 小掉 壽　　主幹兼埋蔵文化財係長 山田 典嗣  
事　務　主任主事 川越 晴美 (区画整理課)  
調査担当　技　師 西嶋 剛広　　嘱託員 鈴木 弘子 (第28地点)  
　　　　　技　師 石村 友規 (第31地点)

(平成21年度)

総　括　文化財課長 永井 淳生　　副主幹兼埋蔵文化財係長 富永 英典  
事　務　主任主事 川越 晴美 (区画整理課)  
調査担当　主任技師 金丸 武司　　嘱託員 島井 伸幸 (第32地点)

整理作業

(平成20年度)

総　括　文化財課長 小掉 壽　　主幹兼埋蔵文化財係長 山田 典嗣  
事　務　主任主事 川越 晴美 (区画整理課)  
整理担当　技　師 西嶋 剛広　　嘱託員 永友 加奈子

(平成22・23年度)

総　括　文化財課長 田村 泰彦　　主幹兼埋蔵文化財係長 富永 英典  
事　務　主任主事 平原 隆宏 (区画整理課)  
主任主事 長友 浩 (区画整理課)  
整理担当　主任技師 金丸 武司　　主任技師 石村 友規  
主任技師 西嶋 剛広　　嘱託員 徳丸 理奈

- 4 本書の編集は西嶋が、執筆は各地点の調査担当が分担しておこなった。
- 5 掲載した図面のうち、現場における実測は各調査担当が現場作業員の協力を得ておこなった。遺物の実測は各調査担当が、徳丸、整理作業員の協力を得ておこなった。
- 6 現場、及び出土遺物の写真撮影は各調査担当がおこなった。
- 7 陶磁器の鑑定は、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏に依頼した。
- 8 本調査における出土遺物、実測図、撮影写真などはすべて宮崎市教育委員会で保管している。

## 本文目次

### 第Ⅰ章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境.....	西鶴.....	1
第2節 歴史的環境.....		1

### 第Ⅱ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯.....	金丸.....	4
------------------	---------	---

### 第Ⅲ章 調査の成果

第1節 第28地点の調査.....	西鶴.....	5
第2節 第31地点の調査.....	石村.....	19
第3節 第32地点の調査.....	金丸.....	35

## 挿図目次

第1図 周辺の遺跡.....	西鶴.....	2
第2図 高岡麓遺跡本調査地点位置図.....		3
第3図 高岡麓遺跡第28地点調査区平面図.....		6
第4図 土坑1・2・3及び出土遺物実測図.....		8
第5図 土坑4・5・6実測図.....		9
第6図 溝1及び出土遺物実測図.....		10
第7図 井戸実測図・組立模式図.....		11
第8図 遺構外出土遺物実測図1.....		13
第9図 遺構外出土遺物実測図2.....		14
第10図 遺構外出土遺物実測図3.....		15
第11図 遺構配置図及び東壁土層断面図.....	石村.....	20
第12図 石塔群実測図.....		22
第13図 石塔群4・5実測図.....		23
第14図 石塔・石敷部出土遺物実測図1.....		24
第15図 石塔・石敷部出土遺物実測図2.....		25
第16図 土坑及び土坑出土遺物実測図.....		27
第17図 墓石1・2実測図.....		29
第18図 墓穴1・2及び出土遺物実測図.....		30
第19図 墓穴3実測図及び墓穴墓石対応関係復元図.....		31
第20図 その他遺構・遺構外出土遺物.....		32
第21図 第32地点遺構分布図.....	金丸.....	36
第22図 土坑及び土坑出土遺物実測図1.....		38
第23図 土坑及び土坑出土遺物実測図2.....		39

第24図	ピット及びピット・土坑・包含層出土遺物実測図	40
第25図	遺構外出土遺物実測図1	42
第26図	遺構外出土遺物実測図2	43
第27図	遺構外出土遺物実測図3	44
第28図	遺構外出土遺物実測図4	45
第29図	遺構外出土遺物実測図5	46
第30図	遺構外出土遺物実測図6	47

### 表 目 次

第1表	第28地点出土遺物観察表1	西鶴	16
第2表	第28地点出土遺物観察表2		17
第3表	第31地点出土遺物観察表	石村	33
第4表	第32地点出土遺物観察表1	金丸	48
第5表	第32地点出土遺物観察表2		49

### 図 版 目 次

図版1	高岡麓遺跡遠景	西鶴	51
図版2	第28地点調査地遠景・調査区全景		52
図版3	第28地点調査区全景		53
図版4	第28地点土坑		54
図版5	第28地点溝・井戸・ピット・遺構出土遺物		55
図版6	第28地点遺構外出土遺物		56
図版7	第31地点石塔群検出状況・調査区全景	石村	57
図版8	第31地点石塔群（遺構・出土遺物）		58
図版9	第31地点土坑（遺構・出土遺物）		59
図版10	第31地点墓1		60
図版11	第31地点墓2		61
図版12	第31地点墓3・墓2・3出土遺物・遺構外出土遺物		62
図版13	第32地点検出遺構	金丸	63
図版14	第32地点検出遺構2		64
図版15	第32地点出土遺物		65
図版16	第32地点出土遺物		66

## 第Ⅰ章 遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境

高岡麓遺跡は宮崎市高岡町内山ほかに所在する。高岡町域はその大部分が山林で占められており、都城盆地周辺から宮崎平野へと流れる大淀川が、その山地を縫うように東流している。支流には、飯田川、瓜田川、内山川、浦之名川などがある。これらの河川沿いには河川の開析による河岸段丘があり、また、狭いながらも沖積地が形成されている。

これらの段丘面や沖積地上に集落が営まれているが、この沖積地のうち最も広い面積を有するのが、大淀川とその支流の飯田川が合流する付近の沖積地で、南は大淀川、東は飯田川、そして北は天ヶ城がある高岡山地に囲まれるような場所にあたる。この沖積地は現在の高岡町中心市街地となっているが、高岡麓遺跡の範囲はおおむねこの範囲と合致している。

### 第2節 歴史的環境

高岡町域には数多くの遺跡が存在し、その多くは河岸段丘上や丘陵上に営まれている。沖積地にも少ないながら各時代の遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺跡には始良大塚火山灰層下層から石器群が出土した高野原遺跡や、集石遺構、ナイフ形石器が出土した向屋敷遺跡などがある。

縄文時代の遺跡は草創期から晩期まで数多く、玦状耳飾が出土した早期の永迫第2遺跡や、前期の久木野遺跡、糸魚川産ヒスイ製勾玉が出土した晩期の学頭遺跡などがある。

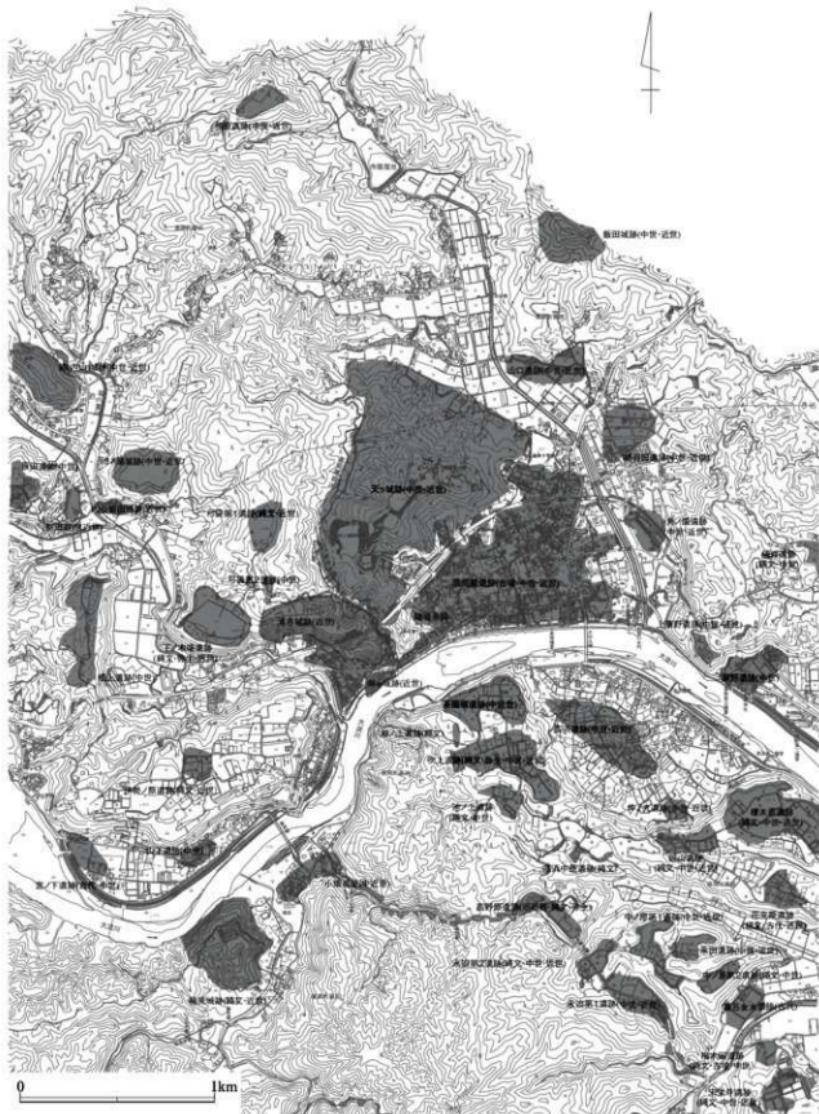
弥生時代、古墳時代の調査例は少ない。弥生時代では、丹後堀遺跡、学頭遺跡で住居跡が確認されている。古墳時代では、高岡麓遺跡、八児遺跡などで集落跡が、久木野地下式横穴墓群では6世紀前半の地下式横穴墓4基が調査されている。また、詳細は不明だが、県指定史跡の高岡町古墳があり、その周辺から土器と鉄製品が出土している。

古代には、高岡周辺は「穆佐郷」と言っていた。この時期の遺跡には、9世紀後半の土師器焼成土坑が6基以上検出された蕨野遺跡、越州窯系青磁碗や灰釉陶器皿、綠釉陶器皿が多く出土した三生江遺跡や、的野遺跡などが知られている。

中世には高岡周辺は島津氏と伊東氏の争いの舞台となる。その中心となったのは穆佐城である。穆佐城は宮崎県内でも最も古い山城の一つで、巨大な堀によって大きく4つの区画に区分される、南九州に特徴的な館屋敷型城郭である。継続的な調査がおこなわれておらず、次第にその様相が明らかになりつつある。

近世になると、高岡の中心地は穆佐城のある穆佐郷から天ヶ城のある高岡郷へと移っていく。高岡郷の成立は、慶長5年、閑ヶ原の戦いの後、島津義弘により島津藩東口の要として天ヶ城が整備されたことに関わっている。天ヶ城の整備に伴って、周辺にあった穆佐郷、飯田郷、綾郷、倉岡郷、野尻郷の一部を合わせた高岡郷が成立した。天ヶ城のある山の裾には、薩摩、大隅、日向から700余人の武士を集住させ、麓が形成されて以後、高岡郷は関外四ヶ郷の中心として発展する。この麓が、高岡麓遺跡である。

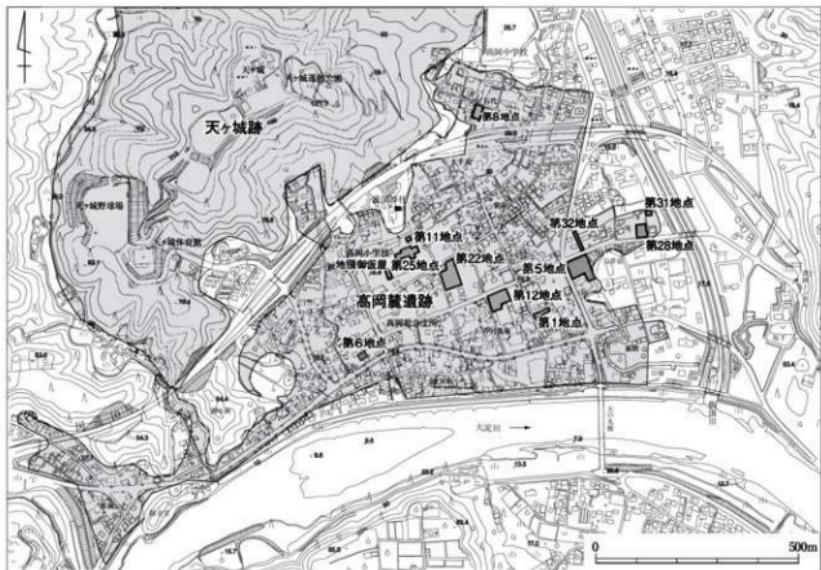
麓は東西と北の三方を山で囲まれ、南側には大淀川が流れしており、防御的な地形であるといえる。街路の設計に当たっては、周到な計画性がうかがわれ、南北方向に伸びて天ヶ城の大手



第1図 周辺の遺跡

門や搦手門に通じる街路とそれにはほぼ直交する大きな街路を中心として街区が設計されている。郷土屋敷や、町屋も計画的に配置されているよう、現在高岡小学校がある地点にあった地頭仮屋を中心に郷土屋敷が配置され、その南側の大淀川沿いに町屋が配置されている。また、町屋を挟んだ大淀川や飯田川の河岸周辺、内山神社周辺にも郷土屋敷が点在している。

高岡麓遺跡はこれまで確認調査を含め33地点での調査がおこなわれている。そのうち本調査がおこなわれたのは、今回報告する4つの地点を含めた12の地点である。町屋が調査された第1地点では、火災による焼土層や井戸跡などが確認された。現在郵便局のある第5地点では幕末の武家屋敷跡が、第6地点では海老原氏屋敷跡の調査で根石を伴う柱穴や整地層などが確認された。第8地点は内山神社北側で、郷土唐仁原家屋敷跡にあたる。切石や礫によってつくられた武家門跡や土坑、溝状遺構、整地層などが確認されている。第12地点では、溝状遺構や土坑などとともに16世紀末から19世紀にかけての肥前産、薩摩産の陶磁器類が出土した。第11地点、第22地点からも近世や古代の遺構が確認されている。第25地点は高岡小学校グランドで、地頭仮屋、鍊土館のあった地点である。いくつかの建物が確認されているが、江戸末期に描かれた仮屋の平面図「御仮屋龜図」の間取りと異なっている。描かれた時期と異なる時期の仮屋建物の可能性もあるが、建物の明確な時期等も不明なため、現状では明確にできておらず、今後検討される必要がある。



第2図 高岡麓遺跡本調査地点位置図

## 第Ⅱ章 調査に至る経緯

### 第1節 調査に至る経緯

高岡町建設課（当時）は、高岡市街地東部における宅地開発及び道路整備、下水道整備を行い、良好、良質で災害に強い市街地を創出することを目的に、平成6年度に飯田地区土地区画整理事業として事業化した。事業対象面積は全体で42.5haに上るが、事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地である、古墳時代～近世にかけての散布地の高岡麓遺跡、中・近世の散布地の朝羽田遺跡・角ノ薙遺跡の域内にあたることから、高岡町教育委員会は事業課と埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、工事により埋蔵文化財に影響の生じる部分は、事前に試掘・確認調査を実施し、文化財の取扱いを判断するとした。

平成18年、高岡町は宮崎市と合併するにあたり、本事業は、開発部局は都市整備部に、文化財部局は教育委員会に、それぞれ引き継がれることとなった。工事は飯田川東岸より行われたが、平成19年度以前は、試掘・確認調査により埋蔵文化財が一部で確認されたが、工事内容等から本調査には至っていない。

平成19年度11月、都市整備部区画整理課から次年度の事業の照会があり、予定地のうち調査が可能な区域の確認調査を実施したところ、検出した柱穴の埋土より土師器が出土したことから、埋蔵文化財の取扱いが必要と判断し、区画整理課と協議を行った結果、造成によって2m以上の盛土が行われる部分については、平成20年度に本調査を実施することとした。調査は平成20年6月18日から平成20年8月21日まで実施した。調査面積は920m<sup>2</sup>である。この調査区を第28地点と呼称する。

第28地点の調査中、前年度確認調査が実施不可能であった区域についても確認調査を行った。その結果、第28地点東側に隣接する民家東側の近世墓石が分布する周辺において、近世墓の掘り込みと考えられる遺構が検出されたことから、当該地においても埋蔵文化財の取扱いが必要と判断し、区画整理課と協議した結果、埋蔵文化財への影響が避けられないことから発掘調査を実施した。調査は平成20年7月24日から平成20年8月29日まで実施した。調査面積は80m<sup>2</sup>である。この調査区を第31地点と呼称する。

また平成20年度、区画整理課より次年度の事業の照会があり、予定地の中で埋蔵文化財への影響が生じる区域について確認調査を実施したところ、道路の新設予定区域からピット等が確認されたことから、埋蔵文化財の取扱いが必要と判断し、区画整理課との協議の結果、埋蔵文化財への影響が避けられない部分については、平成21年度に本調査を実施することとした。調査は平成21年6月18日から平成21年8月8日まで実施した。調査面積は300m<sup>2</sup>である。この調査区を第32地点と呼称する。

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 第28地点の調査

#### 1. 調査成果の概要

第28地点は、高岡麓遺跡の東端付近にあたる場所にあり、すぐ東側を大淀川支流の飯田川が流れている。調査地内には、調査前にも住宅が存在していたが、当地はかなり古くから屋敷地として使用されていたらしい。屋敷として利用されていた経緯から、幾度かの建て替えや生活残滓を廃棄するためのごみ穴掘削などによって調査地内は大規模な搅乱を受けていた。また、河川に近いこともあり、たびたび洪水の被害にあったらしく、そのたびに土地を改変していた経緯があるようだ。そのため、第28地点において確認された遺構はさほど多くなく、いくつかの遺構が確認されたにすぎなかった。しかし、これらの遺構や遺構外から多くの遺物が出土している。遺物は近世の陶磁器類を中心として、数は少ないながら古代の土師器、須恵器、中世の青磁なども確認されている。また、ガラス瓶など、近現代の遺物も多く確認された。また、調査地内には、「高岡石」と通称される凝灰岩の切石によって作られた井戸があった。

#### 2. 遺構と遺物

第28地点では、上述のように近現代の搅乱などによって地形が大きく改変されている。その影響等で遺構の遺存状態が良好ではないことや、遺物が全く出土しない、もしくはしても小片で、量も極めて少ないとなどが原因で、時期を明確に判断できる遺構が少なかった。そのため、本節では、時期を限らず遺構ごとに記述を進めていくこととする。

### 土坑

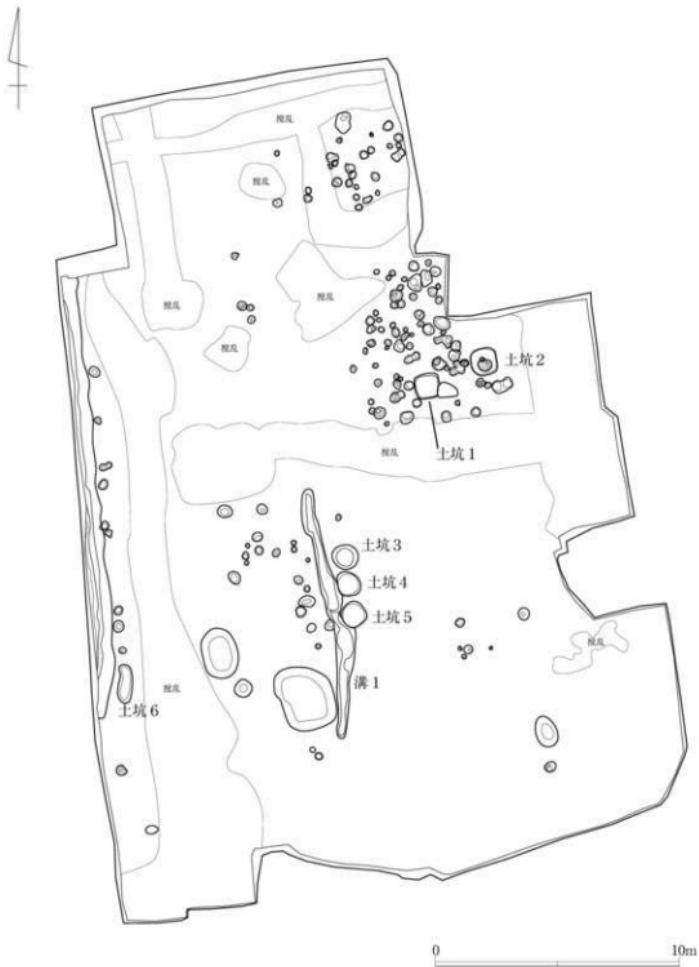
#### 土坑1（第4図）

**遺構** 調査区中央東側で検出された。角の丸いほぼ正方形に近い平面形態の土坑で、規模は東西104.3cm、南北103.2cm、検出面からの深さが14.8cmである。土坑の南東隅をピットによって切られている。底面は平坦に整えられていて、壁面はわずかに外方に開きながら、おおむねまっすぐに立ち上がりしていく形態のようである。搅乱などで遺構の上部は失われていると考えられることから、本来は現状より幾分か深さのある土坑であったと考えられる。埋土は単層で褐色の土が堆積していた。形態や土層の堆積には特徴的な様子が看取できず、どのような性格を持つ遺構であるか明確にすることはできなかった。

**遺物** 土坑底面近くから、染付が1点が検出されたほか、数点の染付片と陶器の土瓶片が出土している。1が、土坑底面近くで出土した染付皿の底部から胴部にかけての破片で、内面見込部分には牡丹が描かれている。外面にも草の文様があり、底部高台内側には「富貴長春」の文字が書かれている。18世紀前半、肥前有田産である。

#### 土坑2（第4図）

**遺構** 調査区中央東側、土坑1の東で検出された。土坑1同様に、角の丸いほぼ正方形に近い平面形態をしている。規模は東西106.4cm、南北111.1cm、検出面からの深さは27.5cmである。



第3図 高岡義遺跡第28地点調査区平面図 (S = 1/200)

土坑1よりわずかに規模が大きいが、これは本遺構の方が残存している深さが土坑1に比べてやや深いためとも考えられる。その他の形態も土坑1と同様で、底面は平坦で壁面はわずかに外方に開きながらまっすぐに立ち上がっている。遺構の軸方向も土坑1と同様である。ただし、本遺構も土坑1同様に、その性格については判然としなかった。また、土坑底面において埋土の切り合い関係から土坑により切られたと判断できるピットが検出されている。

**遺物** 本遺構からは、青磁染付の筒形碗の破片や陶器土瓶の小片が出土している。筒形碗は18世紀後半に位置付けられる。

#### 土坑3（第4図）

**遺構** 調査区中央付近やや南側で検出された。円形に近い平面形態の土坑で、規模は東西109.0cm、南北101.6cm、検出面からの深さは26.5cmである。底面は、土坑の東側がやや深くなっている、壁面は土坑1、2に比べてゆるやかに外方に向かって立ち上がっており、断面形態が逆台形状になっている。

**遺物** 本遺構からは陶磁器片と土師器片が出土している。2は陶器の皿である。内面、見込部分にモミ殻が熔着している。薩摩産で、18世紀代に位置付けられる可能性が高い。その他は、瀬戸美濃系碗の可能性がある染付や染付あるいは白磁の小片と時期不明の土師器の小片がわずかに出土している。

#### 土坑4（第5図）

**遺構** 調査区中央やや南側、土坑3の南に隣接する位置で検出された。土坑3同様、円形に近い平面形態で、規模は東西95.5cm、南北109.9cm、検出面からの深さ27.4cmである。底面は土坑3と異なり平坦である。壁面の立ち上がりは、東側が外方に向かって真っすぐ立ち上がるのに対し、西側がほぼ直立するように立ち上がっている。そのため、断面の形態は逆台形状になっている。

**遺物** 小片ばかりであるが、時期不明の土師器片、染付あるいは白磁の破片、近世のものと思われる土瓶の小片が出土した。

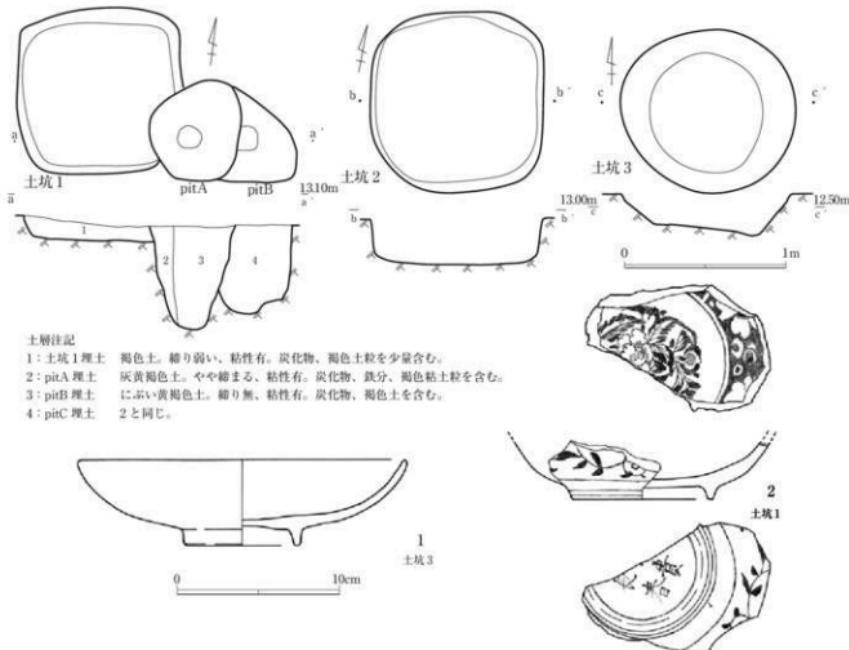
#### 土坑5（第5図）

**遺構** 土坑4の南に隣接する位置で検出された。本遺構も、土坑3、4と同じく円形に近い平面形態である。規模は、東西106.4cm、南北109.5cm、検出面からの深さは16.7cmである。底面は平坦で、土坑4と似ている。壁面は外方に向かって真っすぐ開く形状で、断面形態は逆台形状になっている。構築時期は、土坑3、土坑4との形態の類似性から近しい時期に構築されたものと思われる。

**遺物** 本遺構からは、陶器の小片と土錐片が出土している。いずれも小片であるために図示していない。陶器片は器形についても判断できない。

#### 土坑6（第5図）

**遺構** 調査区西壁付近のやや南寄りで検出された。南北に長い不整形の土坑で、規模は東西



第4図 土坑1・2・3及び出土遺物実測図

54.0cm、南北155.0cm、検出面からの深さが13.0cmである。底面に平坦になる部分ではなく、底面から平面に向かってゆるく湾曲しながら立ち上がっており、断面形態はU字形になっている。埋土は2層に分かれていて、上層はぶい黄褐色土、下層は褐色土である。

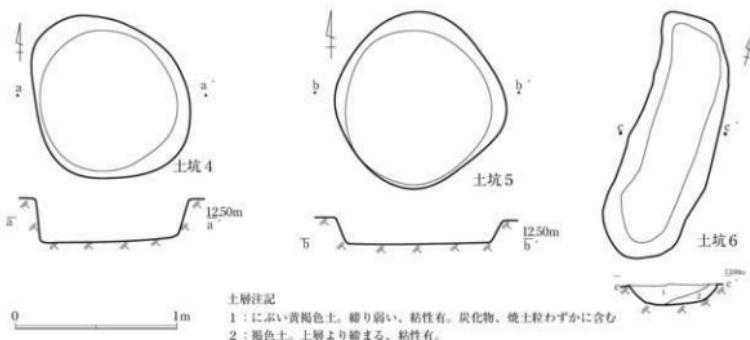
**遺物** 遺物は全く出土していない。そのため、本遺構の時期についても知ることができない。

### 溝状遺構

#### 溝状遺構1（第6図）

**遺構** 調査区中央付近、土坑3・4・5の西側で検出された。南北方向に長い不整形な溝で、長さ10.3m、幅は87.0cmである。搅乱や削平などによる影響で、遺構の残存状態は悪く、底面から約18cm程度が残っているに過ぎなかった。おそらく本来は現状より幾分深く、それに伴つて長さも長かったのではないかと推測される。平面形態と同様に、底面についても不整形で凹凸が多く粗雑な印象を受ける。断面形態も、粗雑な掘削の影響を受けてかU字形になる場所や、左右の壁面の傾斜がかなり違っている場所などがある。一部がわずかに土坑4、土坑5に切られている。

**遺物** 本遺構からは、青磁碗と土師器の小片が出土した。3が青磁碗である。全体に厚はった



第5図 土坑4・5・6実測図

い器形で底部は特に厚みがある。見込には文様が描かれているが、不鮮明ではっきりとしない。その周囲には片切形で花弁のような文様が描かれている。外面の蓮弁文も片切形で描かれたり、劍頭は蓮弁の単位の意識が低く、側線との整合がとれていない部分が認められる。釉は全面に施されているが、外底部を削っているように見える。これらの特徴から、15世紀末から16世紀初め頃に位置付けられると考えられる。土師器は小片であるために細かな時期を知ることはできなかった。

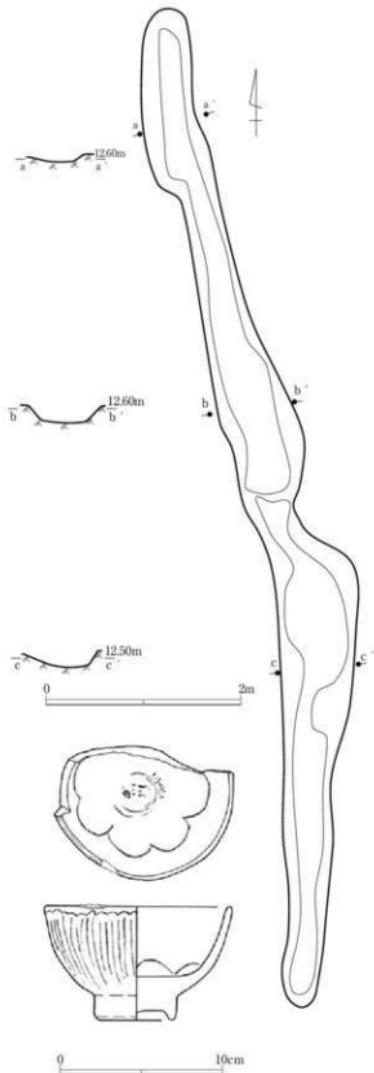
## 井戸

### 井戸1（第7図）

**遺構** 調査前から調査地内にあった井戸である。現在は使用されてはいないが埋め立てられておらず、中を覗き込むと下方に水が溜まっていることを確認できる。井戸は最上段から3段目までが現地表面から見えており、地表面からの高さは約1.3mである。掘り下げなどの調査をおこなっていないため、現在確認できる底面が井戸構築時本来の底面とは断定できないが、現状での深さは約5.6mである。

井戸枠は周辺で「高岡石」と呼ばれる凝灰岩の切石でできており、この切石を4枚組み合わされて1段の枠が形作られ、それが順次上に積み重ねられることで井戸が構築されている。各段の合わせ目などは、漆喰のようなものが塗られて接着されている。井戸枠を構成する各段の切石の組み方は最上段と2段目以下で異なっている。最上段は横幅が2段目以下よりもやや幅広で、左右に作りだされた鈎状の部分を組み合わせることで井戸枠が形作られている。これに対し2段目以下は特に加工の無い2枚の板石と板内面側の左右側辺部分に抉りがあり、横断面が扁平な凸字形をした2枚の板石と組み合わせることで井戸枠が形作られている。各段の高さは最上段と2段目が48cm、3段目が54cm、4段目以下が約60cmである。また、井戸枠の内寸は約72cm四方、外寸で約94cm四方である。井戸枠の段数は最上段から数えて9段目まで確認できた。9段目半ばから下は水に浸かっていて見えないが、井戸枠各段の高さと井戸の深さから勘案すれば、少なくとも10段はあると判断できる。

また、井戸の側面に直交する形で一部断ち割りをおこなって井戸堀方の確認をおこなった。



第6図 溝1及び出土遺物実測図

その結果、井戸枠からおおよそ1mの付近で堀方と思われる掘り込みが確認された。全体を掘り下げるることはできなかったが、堀方は大規模なものではなく受部の浅くて狭い漏斗状のものと考えられ、4ないし5段目以下はほぼ井戸枠と同じ幅で垂直に近い形で整井がなされたのではないかと推測できる。

遺構の時期については、井戸に直接かかわると考えることができる遺物が全く存在しておらず、判断することができない。

#### 遺構外出土遺物（第8～10図）

今回調査地点では、遺構外からの遺物出土量が最も多かった。そのうち、ある程度器形などが分かるものについて図示し、報告する。

4、5は蕎麦猪口である。直線的に外方に開く形態である。4の外面には船が、5の外面には菊花文が描かれている。

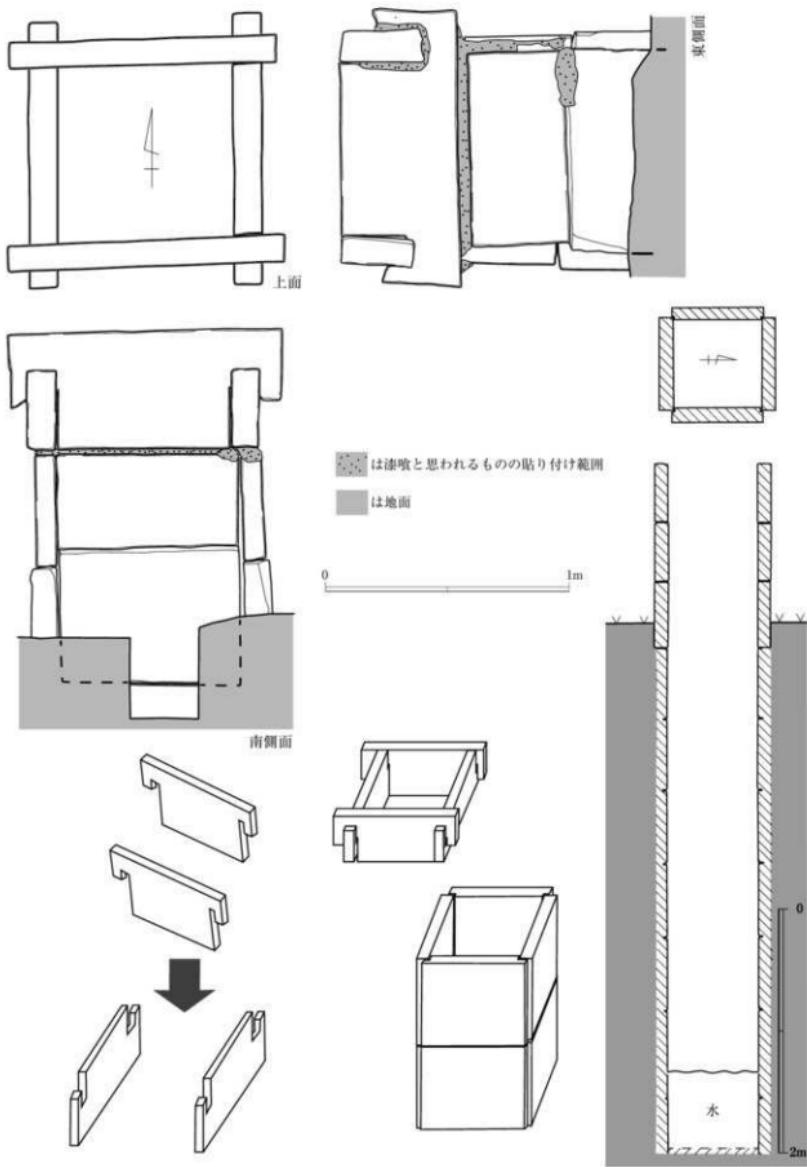
6から11は小杯である。胴部がわずかに内湾しながら外方へ開くもの（6、10）、丸みを帯びた器形のもの（7、8、11）、外反しながら開くもの（9）がある。10の外面には葦文が、11の外面には千鳥文と思われる文様が描かれている。

12は蓋物である。天井部にはツマミが取り付けられているが、欠損している。外面にやや乱れた龟甲文が描かれている。

13から16は小碗である。小振りの器形で、13、14はやや内湾しながら立ち上がり、13の外面底部付近には帶文様が、14の外面には草文が描かれている。15は筒形の碗で見込にコンニャク印判の五花弁文が認められる。16は口縁部が外反している。外面の文様には縁取りが無く、源氏香文様が描かれている。内面見込には「寿」と思しき文字が書かれている。

17は陶器の湯呑茶碗で、鎧茶碗と呼ばれるものである。高台は貼付高台である。

18から32は碗である。18はやや大振りで胴部



第7図 井戸実測図・組立模式図

が直立気味に立ち上がっている。外面には竹文が描かれ、文様部分に銅線釉が掛けられている。19から22は底部からわずかに内湾しながら胴部が立ち上がる器形で、底部に厚みがある。21以外はコンニャク印判による文様があり、19には三ヶ枝松が、20には紅葉が、22には草花文が描かれている。21には梅樹文が描かれている。23はわずかに外方に向かって開く器形で、破片のために染付か白磁か判然としない。24、25は外方に向かって大きく開く器形である。24は青磁染付で、見込には崩れた五花弁文がコンニャク印判で施され、その周囲に二重の圈線が巡らされている。25は見込に手書きの五花弁文が描かれ、外底部分には銘が認められる。26は広東碗で、見込や外面に線描きによる文様が描かれている。27は内湾しながら立ち上がる器形で、口クロ削りが粗雑である。内面には退化傾向のある山水文が描かれ、外底には円刻文が認められる。28も内湾しながら立ち上がる器形である。29から31は底部から胴部にかけて大きく外側に開き、中ほどの屈曲部分から口縁に向かって直立する器形である。30の外面には銅線釉が掛けられている。32は底部のみの破片で、碗と思われる。内面に見られる砂目積の跡は黒味がある。

33から40は皿である。33は天塩皿で、型打成形である。内面には白化粧泥が施されている。34は龍泉窯系の青磁皿である。練花形の器形で、内面には片切形による文様が描かれている。35は陶器の皿で、溝口皿と呼ばれるものである。薄手の作りで、高台内面形状がアーチ形になつていて、高台内面にも施釉されている。内面には砂目積の跡が認められる。36は見込にコンニャク印判による五花弁が描かれ、周囲に圈線と草花文が描かれている。外底には大明年製の文字がある。37の内面にはコンニャク印判による五花弁文があり、その周囲には草花文が描かれている。38は口縁部がわずかに外反する器形で、内面に潰れた五花弁文と圈線が、外面に折松葉文が描かれている。39、40は深みのある器形で、口縁部が外反する器形である。底部には蛇の目大型高台がある。

41から43は鉢である。41は高台の幅が広く、片口付の鉢であった可能性がある。外面に沈線が認められる。42は型打成形で、清朝磁器に影響を受けた文様が描かれている。43は大形の鉢底部片である。内面には釉が掛けられているが外面には認められない。しかし、外面は本来施釉されていなかったのか、のちに剥がれてしまったのかは判断できない。

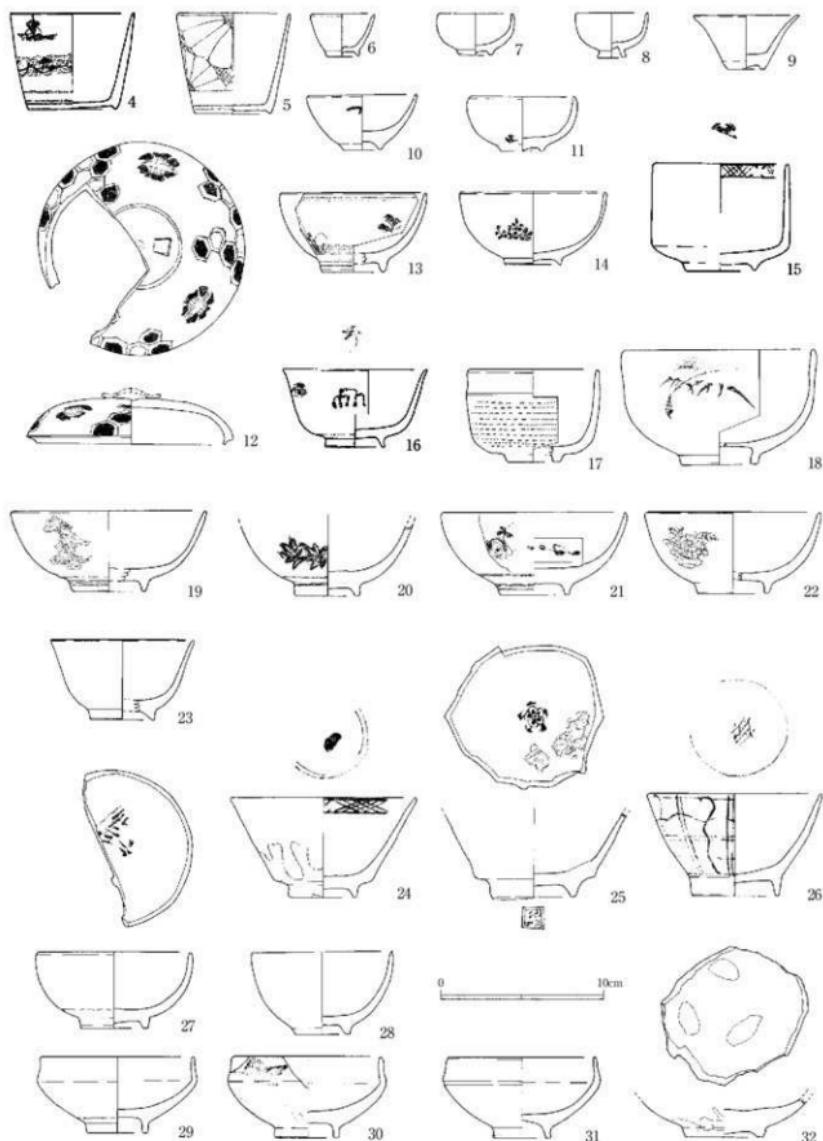
44は灯火具である。ほぼ完形で、上面内側の突出部の一部分が灯芯を置くためか窪められている。

45、46は土瓶である。45は丸みを帯びた器形で、内面に鉄分が付着している。油差などに転用された可能性がある。46はやや扁平な器形で、外面下部にカキメのような調整痕がある。蓋は、頂部にツマミが付く。蓋と瓶本体はセットであると断定できないが、色調などが共通していることから概念的に同一個体のように図示している。

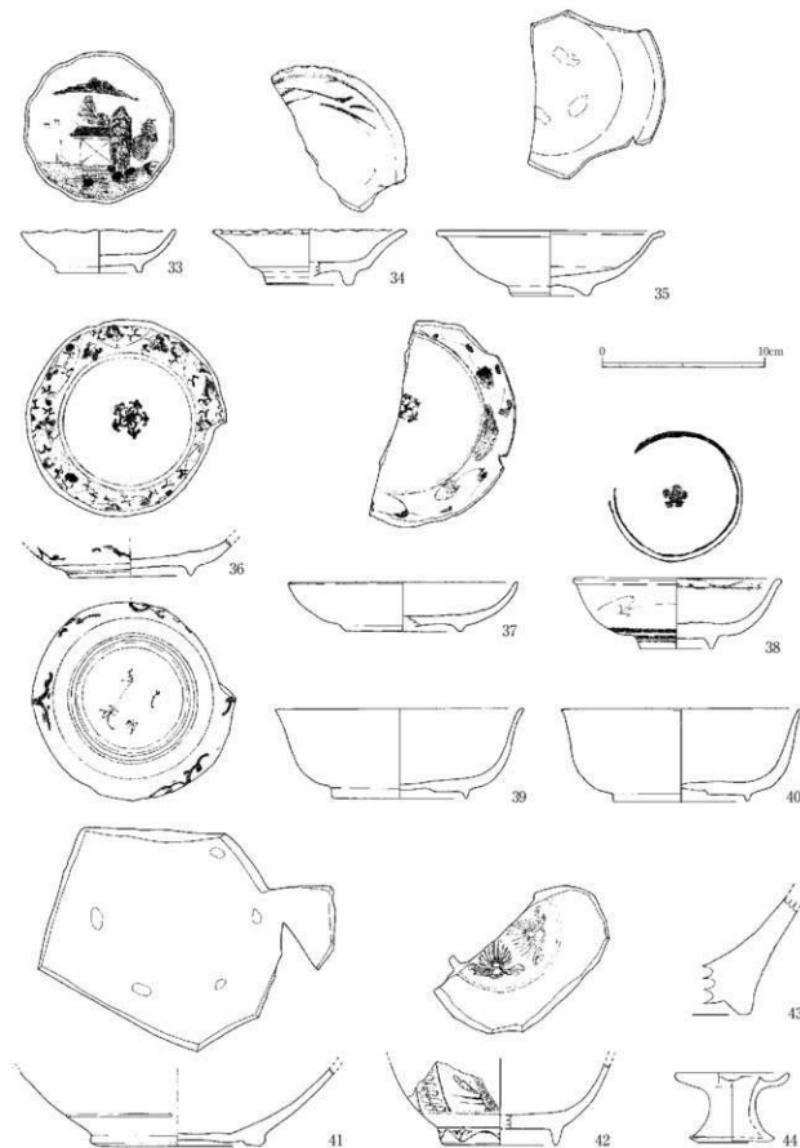
47から51は鉢である。47は小型の餌鉢である。48は捏鉢で内外面に見られるカキメ状の調整が特徴的である。49から51は擂鉢である。49、50は丸みのある器形で、49には片口が作り出されている。51にも片口が作りつけられていて、器形は逆台形状である。

52は火打石である。チャート製で、使用時のものと思われる微細剥離が稜部に認められる。

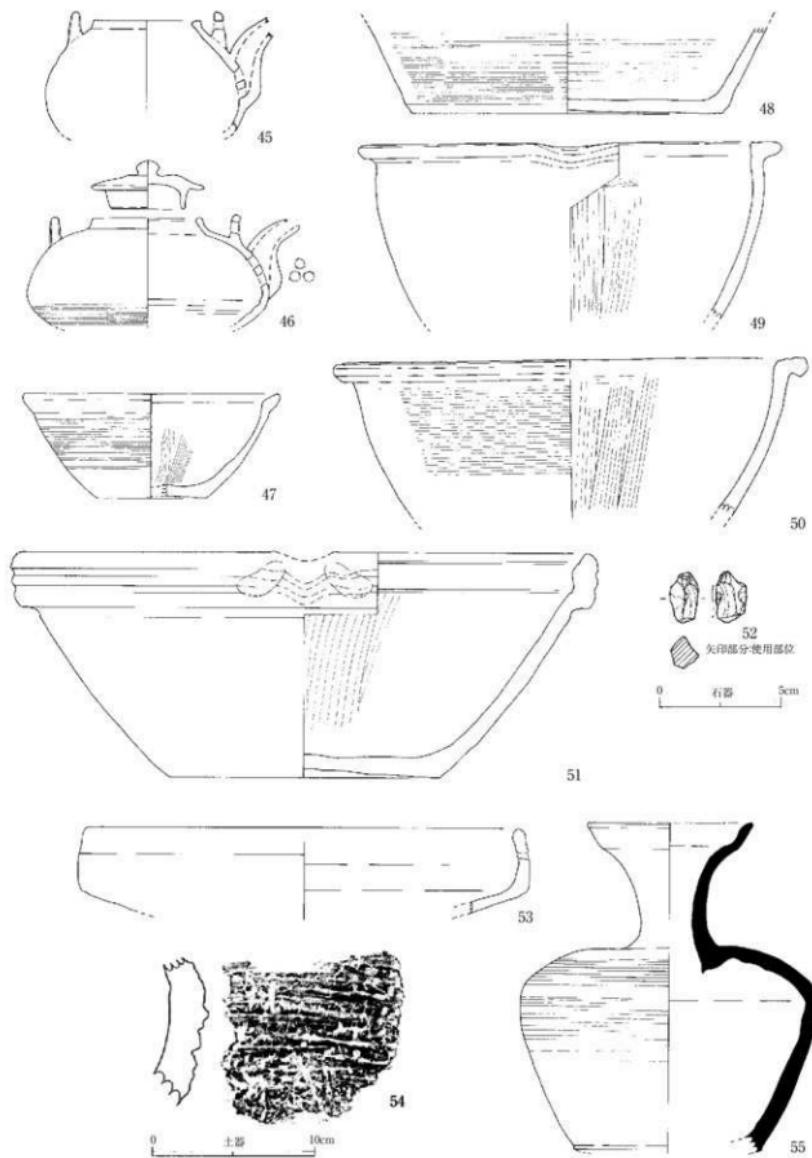
53は焙烙である。底部中央に向かって窄まる器形で、側面の孔は1箇所のみで他は欠損している。54は不明土製品である。内湾気味の形態である。外面には棒状工具あるいは板材の小口部分が押し付けられたような痕跡が認められ、一部に蔓状の纖維圧痕が認められる。55は須恵器長頸壺である。肩の張った器形で肩部から胴部にかけてカキメ調整が認められる。



第8図 遺構外出土遺物実測図 1



第9図 遺構外出土遺物実測図2



第10図 遺構外出土遺物実測図3

第1表 第28地点出土遺物観察表1

図番号	出土位置	種別	器種	法量			時期	产地	備考
				口徑	底径	器高			
図4-1	土坑3	陶器	皿	(19.9)	(7.0)	5.3	18C代?	南摩	内面モミジ付着
図4-2	土坑1	磁器	皿	-	(8.6)	-	18C前半	肥前有田	牡丹唐草文、やや深めの器形
図6-3	溝1	青磁	碗	(11.3)	4.7	7.0	15C末~16C初	龍泉窯系	見込に文様、外側は蓮瓣文
図8-4	埋乱	磁器	青磁碗11	(7.6)	(5.4)	5.9	18C後半	肥前系	
図8-5	埋乱	磁器	青磁碗11	(6.8)	4.6	6.2	18C後半~19C初	肥前系	
図8-6		磁器	小鉢	4.0	1.9	2.7	17C後半~18C前半	肥前	
図8-7	古土	陶器	小鉢	4.5	2.0	2.6	18C後半~19C	関西系	
図8-8	埋乱	磁器	小鉢	(4.4)	(1.7)	2.9	18C~19C	関西系	
図8-9	埋乱	磁器	小鉢	(6.3)	2.3	3.3	18C前半	肥前	白磁
図8-10	古土	磁器	小鉢	(6.6)	2.4	3.4	18C代	肥前	紅絵、外側葉文様
図8-11	埋乱	磁器	小鉢	(6.2)	2.6	3.4	18C~19C初	南摩	千鳥文?、白磁
図8-12	埋乱	磁器	蓋物	11.6	-	(3.1)	18C後半~19C初	肥前	亂丸甲文
図8-13	埋乱	磁器	小碗	(8.8)	(3.8)	5.0	17C後半~18C初	肥前	外側底部帶文様
図8-14	埋乱	磁器	小碗	(8.8)	3.4	4.5	17C末~18C前半	肥前	器形は京焼の影響
図8-15	埋乱	磁器	小碗	(8.1)	(4.2)	6.6	18C後半	肥前	外側青磁釉、内面透明釉
図8-16	埋乱	磁器	小碗	(8.9)	(3.6)	4.7	19C末頃	瀬戸美濃系	口唇部跡痕、源氏文様
図8-17	埋乱	陶器	茹茶碗	(7.8)	(4.2)	4.7	18C代	瀬戸美濃	貼付高台
図8-18	埋乱	陶器	碗	(11.6)	(4.6)	7.1	18C前半	肥前?	竹文、文様部分に銅錆地
図8-19	埋乱	磁器	碗	(11.9)	(4.4)	5.0	18C前半	波佐見系統	三ツ枝文、コンニャク印判
図8-20	埋乱	磁器	碗	-	5.8	-	18C第2・3四半期	波佐見系統	もみじ文、コンニャク印判
図8-21	埋乱	磁器	碗	(11.2)	4.2	5.1	18C後半	波佐見系統	梅樹文
図8-22	埋乱	磁器	碗	(10.3)	(4.3)	5.0	18C前半	波佐見系統	コンニャク印判
図8-23	埋乱	磁器	碗	(8.7)	(3.8)	4.9	19C以降	肥前	釉薺味強い、染付か白磁
図8-24	埋乱	磁器	碗	(11.4)	(4.0)	6.2	18C後半	肥前	青磁付、内面透明釉、印判
図8-25	埋乱	磁器	碗	-	4.9	-	18C後半	肥前鈴江窯	青磁、五花弁手書、高台内に罫
図8-26	埋乱	磁器	広東形碗	(10.8)	5.2	6.3	19C前半	肥前	
図8-27	埋乱	陶器	碗	(9.4)	(4.1)	4.8	18C第1四半期	肥前?	高台内に円刻文、退化山水文
図8-28	埋乱	陶器	碗	8.3	3.2	5.1	18C~19C初	南摩	白南摩、千鳥文らしい文様
図8-29	埋乱	陶器	碗	(9.3)	3.6	4.7	18C前半	肥前?	
図8-30	埋乱	陶器	碗	(9.0)	3.7	5.5	18C前半	肥前	器形は関西の影響、銅錆地
図8-31	埋乱	陶器	碗	(9.0)	(3.4)	5.0	18C前半	肥前	
図8-32	埋乱	磁器	碗	-	4.7	-	16C末~17C初	肥前?	砂目積、移目黒く吉相示す

法量は土器の場合、①、②、③がそれぞれ口徑、底径、器高を、石器の場合がそれぞれ長さ、幅、厚さを示す。

( ) のついた数値は復元の値であることを示す。

第2表 第28地点出土遺物観察表2

図番号	出土位置	種別	器種	法算			時期	产地	備考
				口径	底径	器高			
国9-33	埋瓦	磁器	手塗皿	9.5	5.4	2.7	19C前～中葉	肥前志田窯	型打成形、内面白化粧泥
国9-34	埋瓦	磁器	皿	(11.4)	(5.2)	3.4	15C	薩摩窯系	破花形
国9-35	埋瓦	陶器	溝口皿	(13.8)	(4.7)	4.0	17C前半	肥前内野山窯	鉢口横、薄手で高台まで施釉
国9-36	埋瓦	磁器	皿	-	7.6	-	18C前半	肥前	大明今朝の器、コンニャク印判、酸化氣味
国9-37		磁器	皿	(13.9)	(7.0)	3.5	18C前～中葉	波佐見系統	五花弁以外手書き、酸化氣味
国9-38	埋瓦	磁器	皿	(12.5)	4.4	4.3	18C中～後半	波佐見系統	五花弁コンニャク印判、折松葉文
国9-39	埋瓦	磁器	皿	15.1	8.2	5.6	18C中～後半	肥前	蛇の目大型高台
国9-40	埋瓦	磁器	皿	(14.8)	(8.3)	5.7	18C中～後半	肥前	蛇の目大型高台
国9-41	埋瓦	陶器	鉢	-	10.9	-	19C	関西系	内面空道具跡、片口付の可能性
国9-42	埋瓦	磁器	鉢	-	(6.9)	-	18C末～19C第1四半期	肥前	型打成形、清朝青磁の影響受けた文様
国9-43	埋瓦	磁器	鉢	-	-	-	17～18C	中国？	青磁、外面露胎？
国9-44	埋瓦	陶器	灯火具	6.8	4.2	4.3	18C末～19C代	信楽系統	
国10-45		陶器	土瓶	(6.6)	-	-	18C代	九州	内面に鉄分付着、油差に転用か
国10-46	埋瓦	陶器	土瓶蓋	4.4	-	3.0	18C後半～19C前半	薩摩	
			土瓶	6.2	-	-	18C後半～19C前半	薩摩	
国10-47	埋瓦	陶器	箆括鉢	(15.7)	(6.6)	6.5	18C前	薩摩	
国10-48	埋瓦	陶器	括鉢	-	(16.8)	-	18C～19C前半	薩摩	
国10-49	埋瓦	陶器	括鉢	(21.6)	-	-	18C後半～19C	薩摩	片口付
国10-50	埋瓦	陶器	括鉢	(26.4)	-	-	18C代	薩摩	
国10-51	埋瓦	陶器	括鉢	(34.3)	(16.6)	13.8	18C～19C前半	那系	
国10-52	埋瓦	石器	火打石	2.1	1.1	1.3	チヤート製、使用により壊れている部分有		
国10-53	埋瓦	土鍍器	焰塔	(26.4)	-	-	?	?	孔有
国10-54	埋瓦	土鍍器	不明	-	-	-	?	?	外側にワラ状の織維痕有
国10-55	埋瓦	頸壺器	壺	(9.8)	-	-	9C	?	

法量は土器の場合、①、②、⑤がそれぞれ口径、底径、器高を、石器の場合がそれれ長さ、幅、厚さを示す。

( ) のついた数値は復元の値であることを示す。

### 3. まとめ

今回調査をおこなった第28地点は、高岡麓遺跡の東端付近に位置している。大きく搅乱を受けており、検出された遺構は少なかった。遺構には、土坑、溝状遺構とピットがある。

土坑は6基検出された。土坑1と2は調査区中央東側の互いに近接した位置にある。平面形態や断面形態も類似しており、出土した遺物から見て両者ともに18世紀後半段階に位置付けられる。また、土坑3、4、5も調査区中央付近の隣接した位置で検出されている。時期の分かれる遺物は土坑3で出土した18世紀代の陶器のみであるが、形態的共通性などから見て、土坑4、5もほぼ同じ時期のものであると考えて差し支えないと思われ、今回調査した6基の土坑のうち5基は18世紀代に位置付けられるものと考えられる。これらの土坑は、土坑1と2、土坑3と4と5が、それぞれ形体的類似性や、検出位置の近さから似たような性格を持ったものとも考えられるが、判然としなかった。ただ、調査地内には近世墓の墓石がいくつか集積されている場所があった。もしかしたら5基の土坑はこれらに関わるものであったのかも知れないが、出土遺物や土層堆積状況などにそれを裏付けるようなものはなかったため、可能性の一つとして指摘するにとどめておきたい。土坑6については、検出位置も離れており、形態的に他の土坑とは異なった不整形なものであった。遺物もなく、時期や性格を知ることはできない。

溝状遺構は、削平の影響を受けて、遺存状態が悪かった。本来ならば現状より長く、深さも幾分深かったものと思われる。遺物の出土量はわずかではあったが、中世の青磁碗が出土しており、明確に近世のものと言える遺物はなかった。したがって、この溝状遺構は中世段階に位置付けられる可能性がある。ただし、その他に明確に中世に位置付けられる遺構はなく、溝全体の性格も判然としなかった。

その他、ピットも多数検出された。埋土にいくつかの種類があり、その切り合いからある程度の新旧関係を知ることはできるが、遺物が小片ばかりであることから、時期を判断するに足るものは少なかった。また、掘立柱建物になるような並びのものも確認されていない。

井戸は、構築時期が不明ではあるものの、石の組み方や、井戸掘削の方法などについてわずかながら知見を得ることができた。

遺構の数こそ少なかったが、遺構、搅乱土などから多くの遺物が検出された。最も中心的なものは近世陶磁器で、中でも18世紀代の遺物が最も多い。このことは当地が生活の場として使用された時期が主に18世紀代であったことを示していると思われる。遺構の大半もこの時期に位置付けられるものと考えられた。また、加えて、古代や中世の遺物も確認されており、近世の高岡郷成立以前の当地の様子を知る上で重要である。

#### ＜参考文献＞

- 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究」No.2 日本貿易陶磁研究会
- 島田正浩編1998『天ヶ城跡』高岡町埋蔵文化財調査報告書第16集 高岡町教育委員会
- 島田正浩編2005『高岡麓遺跡（12地点）』高岡町埋蔵文化財調査報告書第39集 高岡町教育委員会
- 久木田浩子編1996『高岡麓遺跡』宮崎県教育委員会

## 第2節 第31地点の調査

### 1. 調査成果の概要

調査は試掘調査において石塔群が確認された部分と、現況で近世墓の墓石が集積されていた部分を中心に調査区を設定した。調査を進めるに従って、北半の石塔群は、基底部部分のみではあるが比較的良好に遺構が残存していたが、その一方で、南半の近世墓が置かれていた部分については、現代の造成によって搅乱されていることが明らかとなった。

石塔群は地輪以外の五輪塔の石材が散乱している状況であり、原位置を保っている地輪と比較すると、その他の水輪、火輪、空風輪が少ないが、これは後世の搅乱によるものと考えられる。石敷を除去すると下層からは、上部構造となる五輪塔と板碑、石敷を敷設するための造成土が確認された。造成土は2層に分層され、造成が段階を踏んで行われたことがわかる。造成土上、下において遺構検出をおこなったところ、土坑が5基検出されたが、造成土上から掘り込まれたものが1基、造成土下から掘り込まれたものが4基確認された。

近世墓については墓石下からビニールを含む造成土が検出され、墓石もその造成の際に一度動かされていた。調査区は宅地内ではあるが、果樹が植えられており、造成はそれに由来するものと想定される。造成土を除去すると墓穴3基と近代の搅乱が検出された。墓穴は3基の内2基で箱状の痕跡を確認し、内部から六道鏡と考えられる7枚の錢貨が出土した。残る1基は箱状の痕跡は確認できなかったが、同じく7枚の錢貨が出土した。

調査区の南東側は大きく現代の造成により削平をされており、造成土を重機で除去した下層からもゴミ穴と見られる直径2.7mの大形の搅乱が検出された。

### 2. 中世の遺構と遺物

#### 石塔群遺構

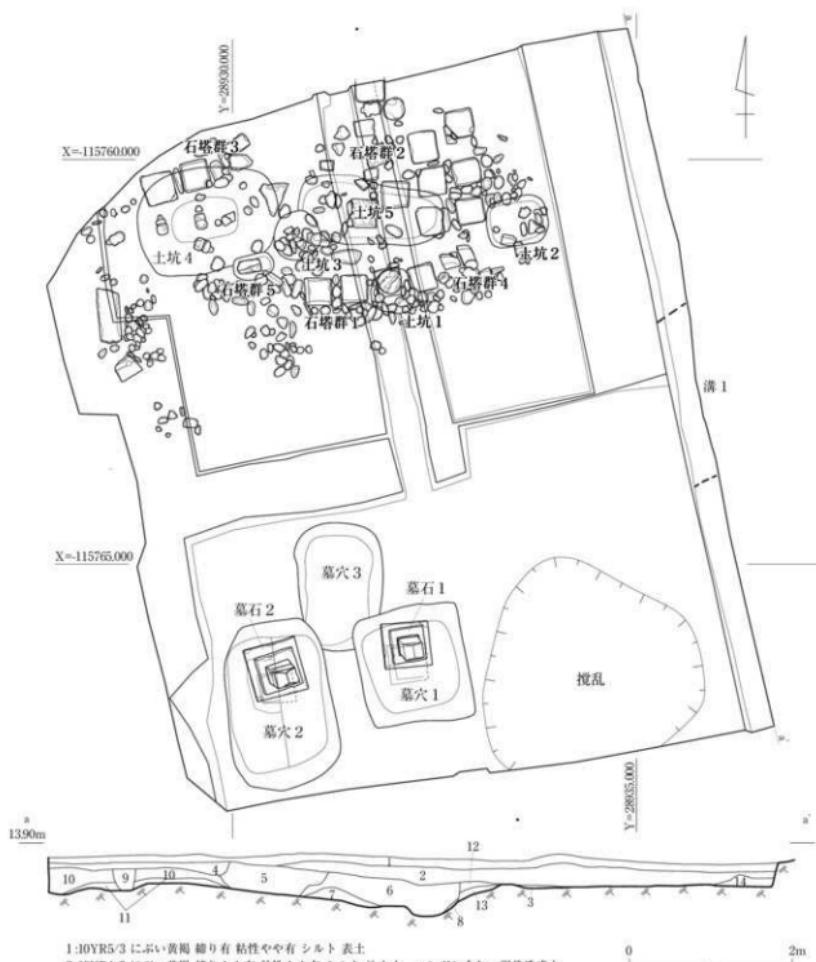
調査区のほぼ北半に位置する。検出時には水輪1基が地輪上に配置されていた他は、空風輪が散乱するなど、後世に大きく搅乱された状況であった。検出された石塔は地輪と水輪の組合せが1基、地輪のみが16基、板碑基部9本から構成されている。石塔の周囲には河原石を敷設し、整地をおこなっている。石塔は原位置を保っている地輪と板碑基部の位置関係から5つのグループに分類することができる。以下では地輪、板碑の並びから遺構番号を振り分け、各々について記述していくことにする。

#### 石塔群1

石塔群内で最も南に位置し、東西方向に並ぶ4基の五輪塔から構成される。3基は地輪のみが残存する状況であったが、残る1基は地輪と水輪の組合せが確認された。地輪の下部には河原石は敷設されておらず、石塔群を造る際の造成土上に直接配置されていた。また地輪と水輪が組み合わさった状態で検出された五輪塔の下部からは土坑1が検出された。その位置関係から五輪塔に間連するものと思われる。

#### 石塔群2

石塔群内の中央付近から東にかけて位置し、8基の五輪塔から構成される。南北方向に3基ずつほぼ平行に2列並ぶグループと、それに平行しない2基が存在するため、もう1グループに分かれる可能性もあるが、石塔群1とは間隔を保ち、密集している状況から1グループとし



第11図 遺構配置図及び東壁土層断面図 (S=1/60)

て捉えた。8基すべて地輪のみが残存する状況であり、周囲の河原石も搅乱のためか疎らな状況にある。地輪の設置方法は石塔群1と同様に、下部に河原石の敷設はなく、造成土上に直接配置してある。平行しない2基の下部からは土坑5が検出されているが、土坑1とは異なり、造成土下からの掘込であり、五輪塔と関連するものではないと想定される。

#### 石塔群3

石塔群内の北西側に位置し、3基の五輪塔から構成されている。やはり3基すべて地輪のみが残存する状況であり、東端の1基は地輪が半分に削れてしまっている。周囲の河原石もほとんど残存していない。他の五輪塔と同じように地輪の下部に河原石の敷設は見られず、造成土上に直接配置されていた。ただし中央の地輪下部からは、掘込は検出されなかったが、ほぼ地輪直下から骨片が出土した。下部から土坑4が検出されているが、土坑5と同様に造成土下からの検出であり、五輪塔と関連するものではないと考えられる。

#### 石塔群4

石塔群1の東側に位置する板碑7本から構成される板碑群である。すべて北側に向けて倒れしており、後世の搅乱の動きが南から北へ向かうものだったと推定される。この板碑群中の6本は同一の掘込内に立てられ、残る1本はその掘込を切る形で掘られた別の掘込内に立てられている。設置するための掘込は別であるが、6本の板碑を意識した位置に立てられていることから同一グループとして捉えている。掘込はすべて造成土上から成されている。また6本の板碑も細かく見ると2本ずつのグループに細別ができる、掘込内の埋土を観察すると、西側に2本が先行して立てられ、中央もしくは東側の順序で立てられたことがわかる。東側の板碑群の下部からは土坑2が検出されているが、造成土下からの検出であり、板碑と関連するものではないと思われる。

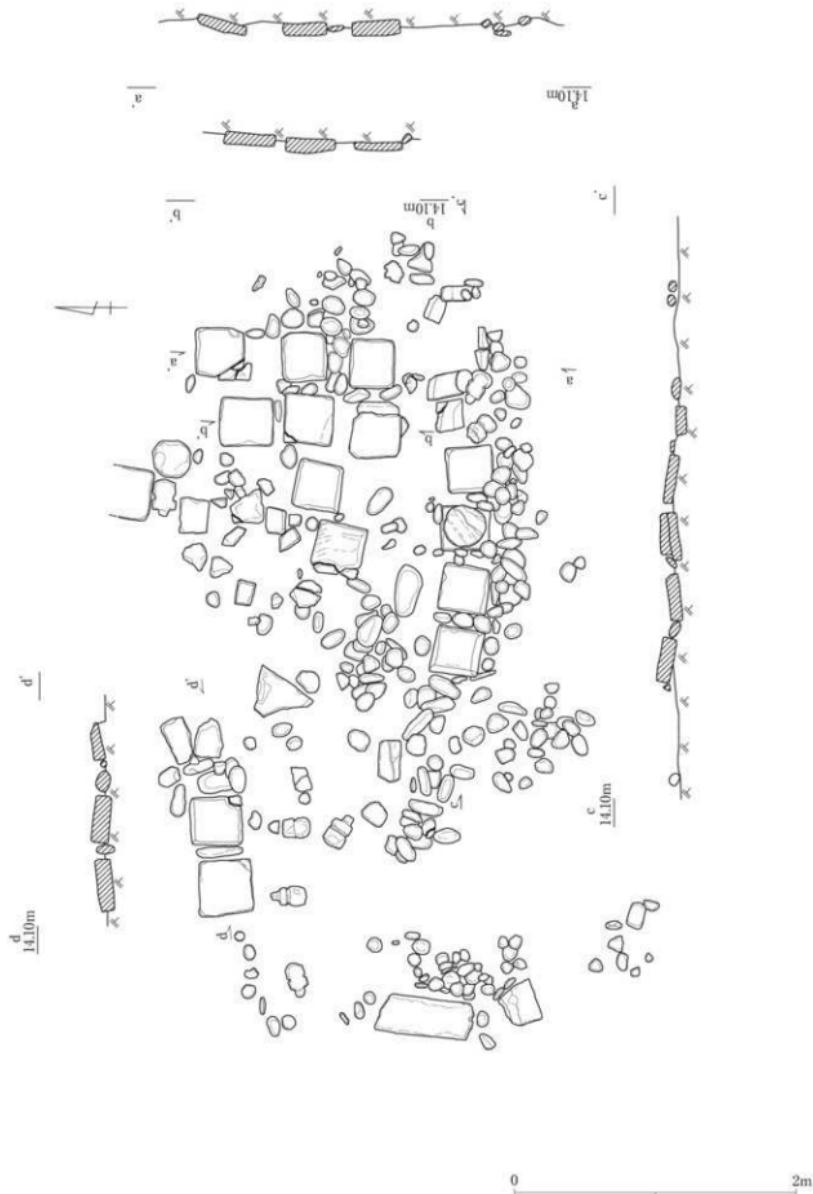
#### 石塔群5

石塔群内の中央西寄りに位置する単独の板碑である。基部のみの残存ではあるが、倒れ込むことなく立っている。石塔群4の板碑と同様に造成土上に掘込を設け設置している。隣接する位置の造成土下に土坑4が存在するが、造成土下からの検出である点や、土坑の肩を切って板碑の掘込が成されていることから関連するものではないと考えられる。

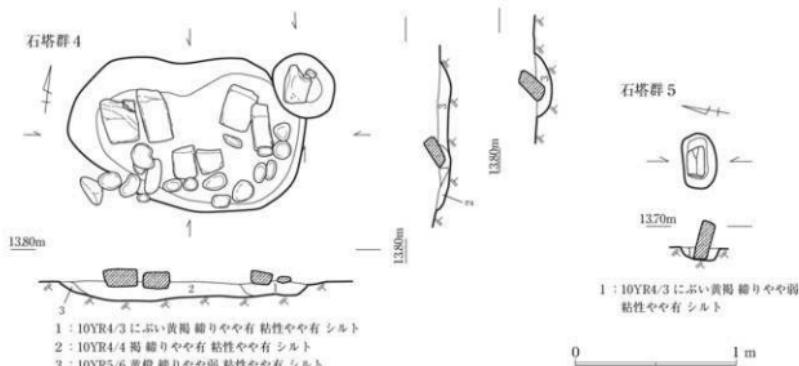
#### 石塔群遺物

ここでは石塔群、石塔群を配置するための造成土中から出土した遺物について記述していく。五輪塔、板碑に関しては残存状況のよいものをピックアップして図化した。1は造成土から出土した白磁碗である。口縁部外面に粘土帯を貼り付けやや肉厚の玉縁口縁としている。軸は比較的薄く施されているが、口縁部内面に軸垂が確認される。13～14世紀前半の所産とみられる。2も造成土から出土した陶器甕口縁部である。口縁部内面に沈線が1条、頸部には刻目が施されている。軸は薄く、特に外面は残存状況の悪さも相まって明瞭ではない。3は造成土から出土した備前焼擂鉢である。7条の擂目を施している。口縁部を欠損しているため時期は不明である。4から7は石塔群4を構成していた板碑である。すべて上部を欠損している。4は一部に幅7mm前後の工具痕が残されている。5は他の板碑と比較すると整形が丁寧で明瞭な工具痕が残されていない。6は破損が激しく明瞭な工具痕は確認できない。7は4と同様の工具で加工されたとみられる。8、9は石塔群の西側で倒れた状態で検出された板碑である。頂部

第2節 第31地点の調査

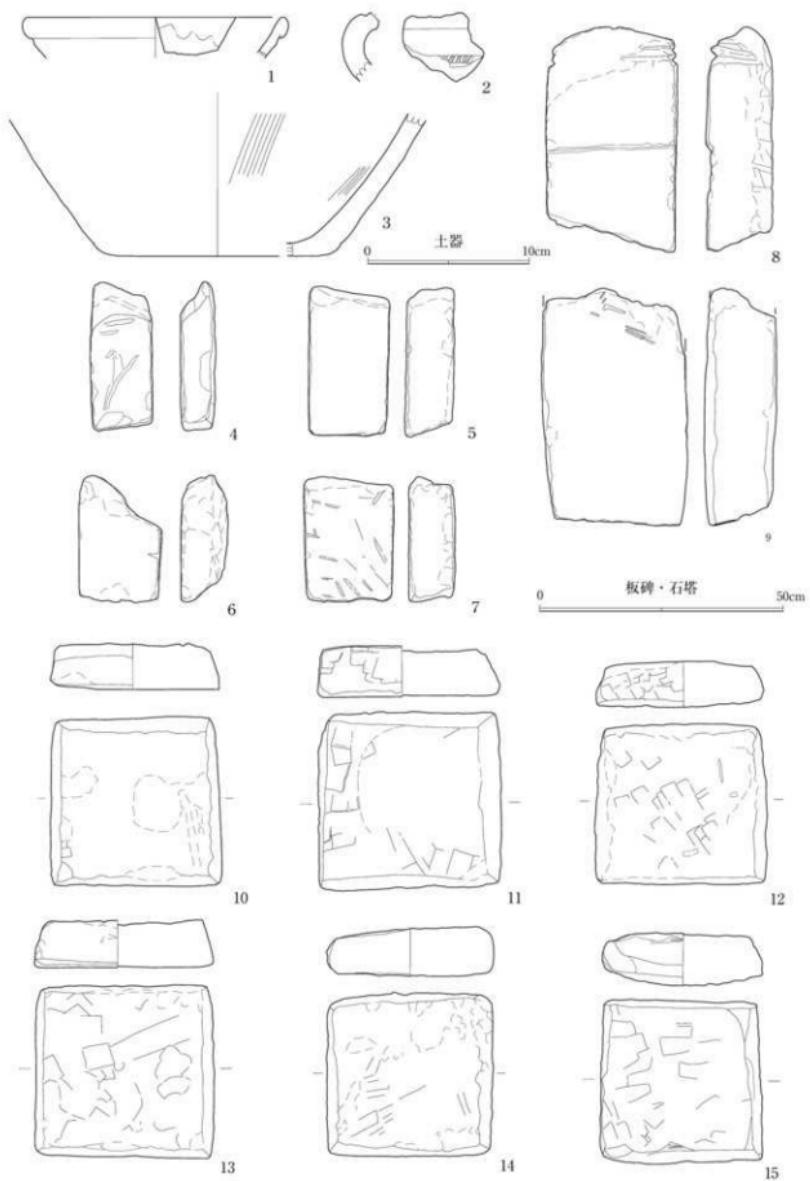


第12図 石塔群実測図 (S=1/40)

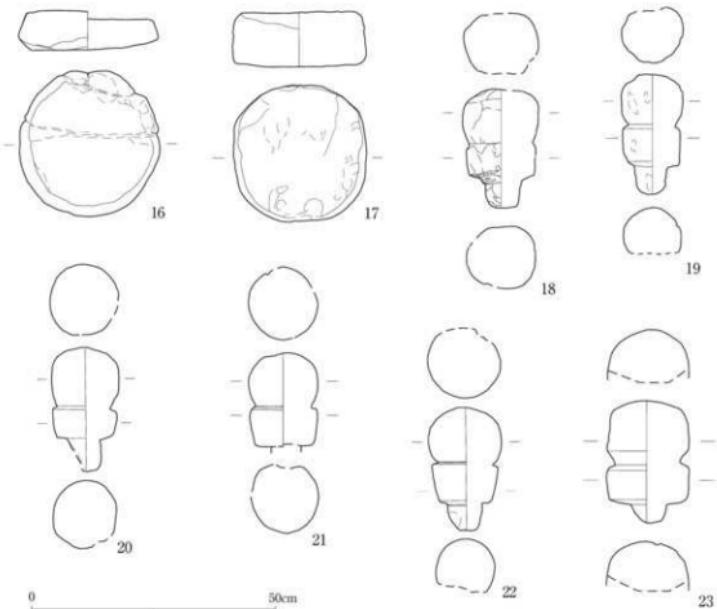


第13図 石塔群4・5実測図 (S=1/30)

から身部と基部との組合せで、近接した位置で出土したが接合はしない。8は頂部から身部の破片である。頭部は山形と推定され、二条線を施し額部を整形している。身部の彫込は2cm程度で比較的浅い。9は板碑基部である。僅かに工具痕が残されている。10から15は地輪である。10から12は石塔群1に設置されていた。11と12は板碑と比較すると6cm程度と幅広の工具痕が残されている。また11は上部が水輪を受けるように若干窪んでおり、側面にも工具痕が確認できる。上部に水輪(16)が組み合わされた状態で検出された。13、14は石塔群2に設置されていた。13は9cm前後、14は4cm前後の工具痕が確認できる。15は調査区中央北端に設置されていた。幅6cm程度の工具痕が確認できる。他の資料と異なり、断面形が反り返るような形状となっている。近接する位置で水輪(17)、空風輪(23)が出土している。すべての地輪が一辺35cm前後に収まり規格性をもって製作されたものとみられる。16、17は水輪である。16は11とセットで石塔群1において検出された。残存状態が悪く工具痕も確認できない。断面形は中央がやや窪む形態をしており、厚みが10cm弱と薄手で円盤状を呈する。17は調査区中央北端で検出された。15の地輪とセット関係にあるものと考えられる。16と比較すると厚手で所謂水輪らしい形態である。上部に窪みは設けられていない。18から23は空風輪である。何れも倒壊、埋没した状況で検出されたため、他とのセット関係がわかるものはない。18から21は調査区の北西、石塔群3に近接する位置で出土した。18は整形がやや粗く空輪頂部は平坦に近い形態となっている。風輪の長さが10cm程度しかなく、寸詰まりの印象を受ける。19は他の空風輪と比較すると長さは大差ないが空輪、風輪共に細身に整形されている。また風輪は垂直に近い円筒形に仕上げられている。20の形態は風輪が短く形態は18に近い。ただし空輪頂部はやや尖頭を意識したものとなっている。21は差込部を欠損している。風輪は上部径が若干大きくなる形態であり、空輪は球形に近い形態である。22は石塔群4付近で出土した。風輪は21よりもさらに上部径の増大が顕著で、縦断面形は逆台形状を呈する。空輪は球形に近いが下部が潰れたようなやや扁平な形態である。23は調査区中央北端で出土した。地輪(15)、水輪(17)と近接する位置からの出土であり、セット関係とみられる。五輪塔が倒壊した際に縦方向に半



第14図 石塔・石敷部出土遺物実測図 1 (土器S=1/3 板碑・石塔S=1/10)



第15図 石塔・石敷部出土遺物実測図2 (S=1/10)

裁されたような形状となったと推定され、ほぼ半分を欠損している。風輪の長さは短めで垂直に近い円筒形である。空輪は隅丸長方形に近い形状であり、全体として角張った印象を受ける。

これらの板碑、五輪塔はすべて凝灰岩製であるが、調査地である高岡は通称「高岡石」と呼ばれる凝灰岩の産出地であり、近世では塀や井戸などにも利用されている。このため今回の調査で出土した板碑、五輪塔も「高岡石」である可能性が高い。また出土状況の特徴として挙げられるのが、火輪の欠如と水輪の希少差である。地輪は設置状態で残されているため数が多くなるのも納得できるが、7個体出土している空風輪と比較しても、水輪2個体、火輪0個体と極端に数が少ない。この事象の原因として、石塔群が削平された際に、水輪、火輪が持ち出された、もしくは空風輪が先行して落下し、後に削平を受け地輪以上（一部水輪）が欠損したという2つが挙げられる。ただし後者の場合は、差込という接合部をもつ空風輪が、ただ截せただけのその他の部分より先行して落下することは考え難く、持ち出しの理由はともかく前者である可能性が高い。

この石塔群の時期であるが、検出されたどの資料にも年号の刻書、墨書きが確認されておらず、蔵骨器の出土もないため決め手に欠けるが、五輪塔が小型である点から15世紀後半以降と推定される。

## 土坑

### 土坑1

遺構 調査区中央北寄りの位置で検出された。平面形は円形を呈し、規模は直径0.38m、深さ0.14mを測る。検出面は石敷き下の造成土上面であり、上部に地輪が位置するため五輪塔に関連する遺構と想定される。遺物は完形に近い瓦質の擂鉢が押しつぶされたような状況で出土した。破片化していることや、蓋に相当する遺物が出土しなかったため蔵骨器とは考え難く、用途は不明と言わざるを得ない。

遺物 24は瓦質の擂鉢である。風化が著しく表面が剥離している部分が目立つが、4条の擂目が確認できる。内底面では「の」の字状に擂目を処理している。口縁部は外面に三角形の粘土を貼り付けて肥厚させている。

### 土坑2

遺構 調査区の北東で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.52m、短軸0.4m、深さ0.2mを測る。検出面は石塔構築のための造成土下であり、石塔群に先行する遺構と考えられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、一見墓壇のように見えるが土層断面や出土遺物からそれを追認することはできなかった。

遺物 遺物は土師器片が出土しているが細片のため図化をおこなっていない。

### 土坑3

遺構 調査区の中央北寄り、土坑4と土坑5を切る形で検出された。平面形は円形で、規模は直径0.38m、深さ0.16mを測る。検出面は石塔構築のための造成土下であり、石塔群に先行する遺構と考えられる。形態や規模は土坑1と類似するが遺物は全く出土せず検出面も異なる。

### 土坑4

遺構 調査区の北西隅、土坑3、板碑に切られる形で検出された。平面形は長辺がやや弧状を呈する隅丸長方形で、規模は長軸1.18m、短軸0.84m、深さ0.58mを測る。検出面は石塔構築のための造成土下であるため、土坑2、土坑3と同じく石塔群に先行する遺構と想定される。断面形は長軸、短軸共に逆台形状であるが、長軸の東側壁のみ傾斜変換点を有する。埋土は4層まで自然堆積と見られるが、炭化物や被熱土器片を含む3層より上位層は人為堆積の可能性が高い。造成土下で検出されたことから勘案すると、4層まで堆積した時点で石塔群を構築するために、造成により埋め戻された可能性が指摘できる。

遺物 遺物は少量の土師器片が出土した。25は土師器壺である。底部と口縁部を欠損している。底部から体部にかけてやや内湾しながら立ち上がる。底部は糸切底である。26は土師器小皿である。口縁部が摘まみ出されただけの浅い形状を呈する。口径は7.2cmと小型で、底部の切り離しは磨滅により残りが悪いが糸切と見られる。両者共に時期を確定し得る遺物ではないが、やや内湾しながら立ち上がる壺の体部や矮小化した小皿の口径から14世紀後半と考えたい。

### 土坑5

遺構 調査区中央北寄りで検出された。平面形は隅丸長方形で、長軸1.2m、短軸0.5m、深さ0.07mを測る。検出面は石塔群構築のための造成土下であり、やはり石塔群に先行する遺構と考えられる。埋土は單一層であり断面は皿状を呈する。

遺物 遺物は土師器片が出土しているが細片のため図化をおこなっていない。



第16図 土坑及び土坑出土遺物実測図 (造構S=1/30 遺物S=1/3)

### 3. 近世の遺構と遺物

#### 近世墓

今回の調査では3基の近世墓の調査をおこなった。ここでは墓石、墓穴の順に記述していく。

#### 墓石1

調査区中央南端部に設置されていた。墓石全体の高さは0.95m、墓石本体は高さ0.63m、幅0.24m、厚さ0.21m、一段目の台石の高さは0.14m、幅0.42m、厚さ0.42m、二段目の台石の高さは0.18m、幅0.59m、厚さ0.56mを測る。一段目の台石には墓石本体を設置するために深さ3cm程度の受けが彫り込まれている。墓石本体は頭部が寄棟形を呈し、その下部に2本の条線を刻んでいる。正面には花燈形を有し、その上部に円形の彫込を設けている。円形の彫込内に文字は刻まれていない。花燈形には「常雲妙照大師」という戒名が刻まれ、下部には蓮華文が施されている。花燈形の両脇には没年である「宝永八辛卯」「正月初一日」が刻まれている。戒名から成人女性が埋葬されたことがわかる。

#### 墓石2

墓石1の西側に設置されていた。墓石全体の高さは1.07m、墓石本体の高さは0.73m、幅0.28m、厚さ0.19m、一段目の台石の高さは0.19m、幅0.48m、厚さ0.45m、二段目の台石の高さ0.16m、幅0.65m、厚さ0.65mを測る。墓石1と同様に、一段目の台石には墓石本体を設置するための受けが彫り込まれている。墓石本体は頭部が寄棟形を呈し、その下部に2本の条線を刻んでいる。正面には花燈形を有し、その上部に円形の彫込を設けている。円形の彫込内には「心」の文字が刻まれている。花燈形には「牲端禪海居士」という戒名が刻まれ、下部には蓮華文が施されている。花燈形の両脇には没年である「宝永四丁亥年」「十二月十一日」が刻まれ、右側面には被葬者である「入田勝左衛門」の名が刻まれている。この名前と戒名から成人男性が埋葬されていることがわかる。

#### 墓石3

墓石1の東側に台石のみ設置されていたが、攪乱により明らかに原位置を保っていなかったため図化していない。調査区に近接する位置でこの台石に合う「遍安貞圓信女」という戒名が刻まれた墓石本体を確認している。戒名から成人女性が埋葬されていたことがわかる。

#### 墓穴1

**遺構** 墓石1に対応する墓穴と想定される。墓石1の直下で検出されたが、検出面との間に現代造成土を挟んでおり、造成の際に墓石を動かしたことことが明らかになっている。平面形は正方形に近い形状で、一辺1.4m、深さ1.11mを測る。墓穴の中位付近から箱状の痕跡が確認され、板材が存在したと想定される部分から釘が出土した。箱は一辺0.5m程度で、高さは土層断面から0.6m程度と想定される。また墓穴底部からも木材痕跡とみられる土層が検出され、そこから釘が出土している。箱内からは六道鏡として7枚の銭貨が出土している。

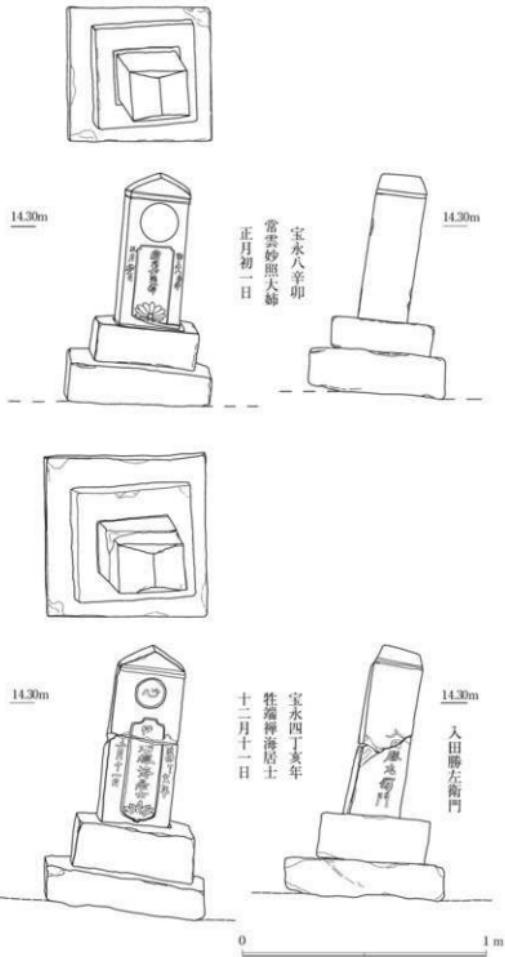
**遺物** 27は埋土内から出土した景德鎮産青花瓶の破片である。28は箱内から出土した銭貨である。4枚が銷着しており確認できる2枚は寛永通宝である。29も箱内出土の銭貨である。2枚が銷着しており、確認できる1枚は寛永通宝である。もう1枚には銭貨を納めた袋のものと思われる繊維が確認できる。30から32は鉄釘である。表面には木質が付着している。この他に破片となった寛永通宝が1枚、鉄釘が多数出土している。

## 墓穴 2

**遺構** 墓石 2 に対応する墓穴と想定される。墓穴 1 と同様に、墓石 2 と検出面との間には現代造成土を挟んでいた。平面形は隅丸長方形であり、長軸 2.8m、短軸 1.3m、深さ 1.25m を測る。

やはり箱状の痕跡が墓穴の中位付近から確認できたが、墓穴 1 と比較すると不明瞭であり、土層断面では明瞭に捉えられていない。むしろその周囲にある土層断面で 2 層とした、箱を設置した際の掘込とみられる層が明確に分層できた。平面から見た箱の一辺は約 0.4m である。また箱板材の位置から鉄釘が出土した。さらに墓穴 2 では棺底板とみられる痕跡が一部で確認できた。棺底板は長軸 1.4m と遺骨を収めた箱より大きく、墓穴底に近いサイズである。またその下部からは持手とみられる棒状の木材痕跡が確認できた。半裁の際に痕跡に気付かず底まで掘削してしまったため 1 本だけの確認となつたが、本来は 2 本で神輿の担ぎ棒のような形態であったと想定される。箱痕跡内の副葬品は六道錢とみられる 7 枚の銭貨である。

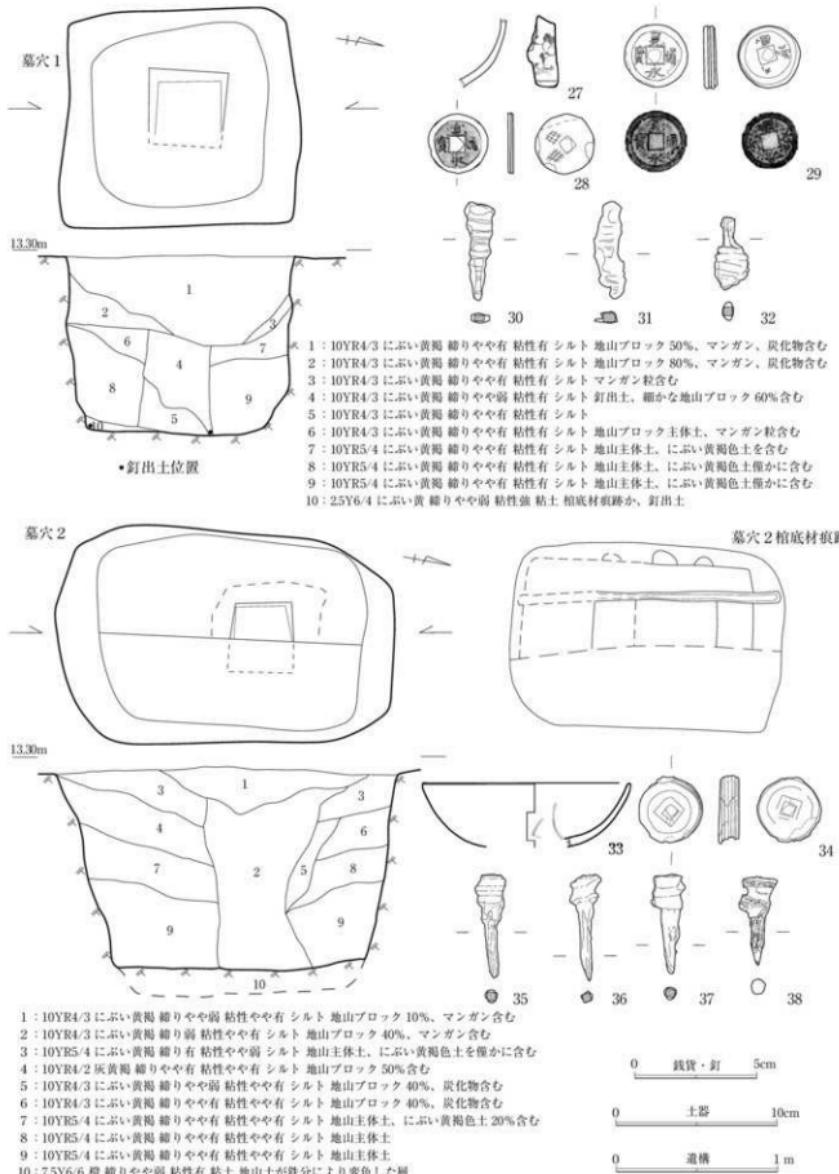
**遺物** 33 は埋土中から出土した



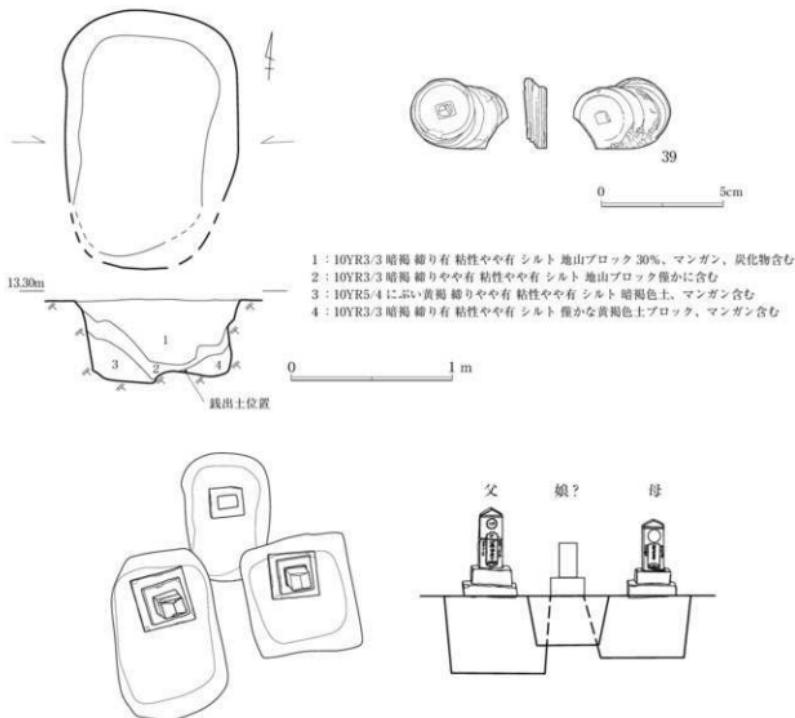
第17図 墓石 1・2 実測図 (S=1/20)

陶器皿である。肥前系の京焼風皿で 17 世紀後半のものである。体部が内湾しながら緩やかに立ち上がる。34 は箱痕跡内から出土した 7 枚の銭貨である。7 枚すべてが鋳着し、また両端の銭貨が共に裏面のため銭種は不明である。35 から 38 は鉄釘である。表面に木質が付着している。団化した 4 本すべて釘頭から中程まで横方向の木目が確認され、そこから下は縱方向の木目が確認できる。横方向の木目は使用された板材の厚みを表しており、概ね 1.5cm 前後である。

## 第2節 第31地点の調査



第18図 墓穴1・2及び出土遺物実測図



第19図 墓穴3実測図及び墓穴墓石対応関係復元図（遺構S=1/30 遺物S=1/2 復元図S=1/60）

## 墓穴3

**遺構** 墓穴1、2の北側に位置し、その一部を両者に切られている。墓石3と対応する可能性が高い。平面形はやや歪な隅丸長方形で、長軸1.6m、短軸1.08m、深さ0.5mを測る。底面は中央がやや盛り上がる形状である。壁面は他の墓穴と同様に垂直に近い角度で立ち上がるが、墓穴1、墓穴2と異なり遺骨を収めたとみられる箱状痕跡は確認できなかった。土層堆積状況も単調で墓穴内に構造物があったとは判断し難い。土層断面図の2層が蓋材の痕跡と考えられ、木蓋土坑墓となる可能性が想定される。遺物は墓穴のはば中央で六道錢として7枚の錢貨が出士している。

**遺物** 39は錢貨である。7枚が銹着している。錢貨を収めた袋とみられる纖維痕が確認できる。

以上3基の近世墓について記述してきたがここで簡単にまとめておきたい。まず墓石と墓穴の対応関係である。先にも既述したように、墓石と墓穴の間には現代の造成土が存在し、墓石が原位置を保っていないことは明らかである。また墓石1と墓石2に関しては直下に墓穴が位

置してはいるが、この造成の際に入れ替わった可能性も想定される。そこで改めて墓石に刻まれた戒名、名前と墓穴をみると、戒名から墓石1の被葬者は成人女性であり、墓石2の被葬者は戒名と名前の両方から成人男性であることがわかる。墓穴1と2を比較すると、墓穴2の方が平面積、深さ共に大きく、標準的な身体的差異を考慮すると男性を埋葬していた可能性が高い。このことから墓石1と墓穴1、墓石2と墓穴2がそれぞれ対応するとみられ。造成後にはぼ正しい位置に墓石を戻したことがわかる。墓穴3に関しては、墓石3が近接地で確認された墓石として唯一のものであり、墓穴1、2に比べて小さく単純な構造に見合う、小型で簡素な墓石であることから対応関係にあるとみられる。

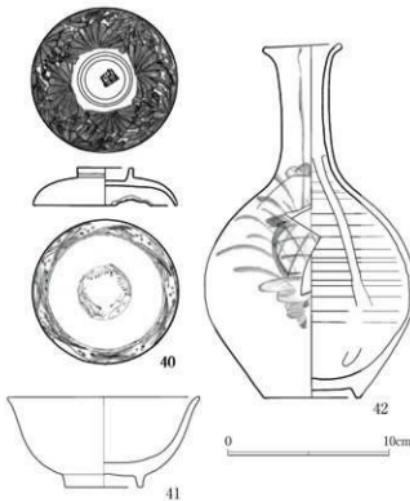
次に被葬者の関係であるが隣接した位置に墓穴を設け、尚且つ墓石1と墓石2はそれぞれ成人女性、成人男性であることから夫婦と想定される。また墓石3の被葬者は成人女性であるが、墓穴が墓穴1、墓穴2と切り合いをもつほど隣接した位置にあること、墓石が非常に簡素であることから、夫婦の娘と考えられる。

最後に墓穴1、墓穴2で確認された箱状痕跡について検討したい。箱状痕跡は墓穴1で一辺が約0.5m、高さが0.6m、墓穴2では一辺約0.4mしかない。墓穴1の場合は被葬者が女性といふこともあり、膝を折り曲げた座葬であれば埋葬することも可能である。しかし墓穴2は被葬者が男性、さらに墓穴1よりも箱のサイズは小さく座葬としても不可能な大きさである。墓穴1の場合、箱状痕跡の周囲が縱方向の不自然な土層堆積をしており再葬の可能性も視野に入れる必要がある。箱の大きさに比べて、非常に大きな墓穴や、不必要なほど大きな底板の存在も、その可能性を追認するものと言える。

#### 4. その他遺構、遺構出土遺物

ここでは前述してきた遺構以外で出土した遺物について述べたい。

40は磁器碗蓋である。産地は肥前で、西洋具須を用いていることから明治から大正期のものである。口縁部の一部が欠け、そこに炭化物が付着している。口縁部を打ち欠き證明皿として転用したものか。41は肥前系の陶器碗である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部に至ると緩やかに外斜するいわゆる「端返り」の形態をもつ。時期は18世紀代である。42は肥前系の磁器瓶である。時期は18世紀第4四半期から19世紀第1四半期である。41、42、は大部分を擾乱に切られ、調査区の東端のサブトレンチ内で僅かに確認された溝1からの出土である。



第20図 その他遺構・遺構出土遺物 (S=1/3)

第3表 第31地点出土遺物観察表

## 出土土器観察表

団番号	出土位置	種別	器種	法量			時期	产地	備考
				口径	底径	器高			
1	石塔群下造成土	白磁	碗	-	-	-	13~14世紀前半	中国	
2	石塔群下造成土	陶器	甕	-	(12.2)	-			
3	石塔群下造成土	陶器	擂鉢	-	-	-		備前	7条の福目
24	土坑1	瓦質土器	擂鉢	(22.4)	12.8	-			4条の福目
25	土坑4	土師器	坏	-	(6.4)	-	14世紀後半		系切底
26	土坑4	土師器	小皿	(7.2)	(6.3)	-	14世紀後半		系切底
27	墓穴1	青花	瓶	-	-	-	16世紀	景徳鎮	
33	墓穴2	陶器	皿	(12.6)	-	-	17世紀後半	肥前	京焼風
40	擾乱	磁器	碗蓋	8.7	3.4	2.3	明治~大正	肥前	斐明皿に転用
41	溝1	陶器	碗	(11.6)	4.8	5.5	18世紀	肥前系	
42	溝1	磁器	瓶	4.5	5.8	21.7	18世紀第4四半期~19世紀第1四半期	肥前系	

## 出土鐵貨観察表

団番号	出土位置	種別	枚数	法量			備考
				径	厚	重量(g)	
28	墓穴1	寛永通宝	2	2.4	0.1	3.45	布痕跡有 重量は2枚分
29	墓穴1	寛永通宝	4	2.6	0.1	10.38	重量は4枚分
34	墓穴2	不明	7	2.4	0.1	18.61	両面とも裏面が表で錢種不明 重量7枚分
39	墓穴3	不明	7	2.4	0.1	19.55	布痕跡有 両面とも裏面が表で錢種不明 重量7枚分

## 出土鉄製品観察表

団番号	出土位置	種別	法量			備考
			長	幅	厚	
30	墓穴1	鉄釘	4.0	0.75	0.4	
31	墓穴1	鉄釘	4.05	0.5	0.5	
32	墓穴1	鉄釘	3.0	0.4	0.4	
35	墓穴2	鉄釘	4.2	0.4	0.4	
36	墓穴2	鉄釘	4.3	0.4	0.4	
37	墓穴2	鉄釘	4.1	0.5	0.5	
38	墓穴2	鉄釘	3.7	0.4	0.4	

## 石塔観察表

団番号	出土位置	種別	器種	法量			備考
				最大長	最大幅	最大厚	
4	石塔群	板碑		(30.5)	12.8	7.3	
5	石塔群	板碑		(30.7)	16.5	9.7	
6	石塔群	板碑		(21.5)	16.7	9.5	
7	石塔群	板碑		(25.8)	18.5	9.5	
8	石塔群	板碑		(46.0)	27.1	13.7	
9	石塔群	板碑		(48.4)	29.5	14.5	
10	石塔群	五輪塔	地輪	34.2	35.0	9.4	
11	石塔群	五輪塔	地輪	37.5	37.2	10.5	
12	石塔群	五輪塔	地輪	35.3	33.0	9.0	
13	石塔群	五輪塔	地輪	36.4	35.0	9.8	
14	石塔群	五輪塔	地輪	33.8	33.8	10.0	
15	石塔群	五輪塔	地輪	32.5	33.0	11.0	
16	石塔群	五輪塔	水輪	29.9		8.1	
17	石塔群	五輪塔	水輪	28.0		11.2	
18	石塔群	五輪塔	空風輪	24.4	152	14.2	最大幅は空輪、最大厚が風輪径
19	石塔群	五輪塔	空風輪	24.6	125	11.8	最大幅は空輪、最大厚が風輪径
20	石塔群	五輪塔	空風輪	26.0	139	13.0	最大幅は空輪、最大厚が風輪径
21	石塔群	五輪塔	空風輪	(19.1)	14.3	14.1	最大幅は空輪、最大厚が風輪径
22	石塔群	五輪塔	空風輪	25.1	151	12	最大幅は空輪、最大厚が風輪径
23	石塔群	五輪塔	空風輪	25.1	169	16.9	最大幅は空輪、最大厚が風輪径

※法量の( )は復元値であることを示す。

## 5.まとめ

高岡麓遺跡第31地点の調査では中世墓と近世墓が確認された。ここではそれぞれの内容について若干の考察を加えまとめとしたい。

今回の調査地は高岡麓遺跡のほぼ東端に位置し、すぐ東側には集落境界となる飯田川が流れている。試掘調査では現在の河川よりもさらに西側、調査地から東に約50mの所で旧河道とみられる落ち込みを検出しており、近世の当該地はまさに集落の境界に位置していたといえる。このような立地に3基の墓が造られていた。被葬者は墓2が入田勝左衛門、墓1がその妻、墓3がその娘と想定される。最初に埋葬されるのは没年が不明であるが、墓穴の切り合い関係から墓3に葬られた娘である。次に勝左衛門が宝永4年（1707）12月11日に亡くなり、最後に妻が宝永8年（1711）1月1日に亡くなる。入田勝左衛門は『高岡町史』「高岡郷士系譜」によると、禄高が三十石余り、入田孫右エ門弟とある。ここで墓に納められた副葬品をみると、三十石余りの禄高がありながら六道錢である7枚の銭貨のみと質素なものといえる。埋葬施設に関しては、墓1、墓2において釘を用いた木製の箱を使用している。墓1は座棺の、墓2に関しては座棺もしくは再葬墓の可能性を指摘した。近世高岡麓における武士の埋葬形態の一端が明らかになったといえよう。

一方、中世の高岡麓（郷）の様子は絵図等もなく明確ではない。中世におけるこの付近の中⼼地は穆佐城が所在する穆佐であり、政治も戦乱の舞台もそちらが中心となる。高岡郷が表舞台に現れるのは、まさに今回調査を行った飯田地区の「河骨」である。永享6年（1432）日向を手中にしようとした島津氏を伊東氏が迎え撃ち、これを撃退したのが「河骨」とされている。今回の調査区の石塔は、年号が刻まれた資料もなく、藏骨器の出土もなかったことから明確な年代は明らかではないが、造成土中の土器や五輪塔の規模からみて15世紀後半頃以降と想定される。早ければまさにこの戦いの頃に石塔群が構築された可能性もある。石塔群は後世の搅乱により上部構造のほとんどを失っていたが、石塔群を構築する際の造成土が確認されるなど一定の成果が得られた。また石塔群の下部からは土坑が5基検出された。石塔群と関連する土坑はそのうち1基のみで、他は検出状況から石塔群に先行する遺構と捉えられる。

今回の調査では近世墓は3基に止まり、中世石塔群は上部が失われていたことから、それらの分類や考察に至れず、調査成果を羅列するに止まった感は否めない。今後近接地の事例と比較しながら検討を行っていくことが課題といえる。

調査面積が80m<sup>2</sup>と狭小であり、得られた情報量も多いとはいえない調査であったが、このような調査の積み重ねが高岡麓遺跡の全体像を明らかにしていく基礎資料となると思われる。

### ＜参考文献＞

- 小山博編 2002『追内遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第59集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 高橋徹也編 1996『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』大分県教育委員会
- 藤本晶子編 2005『八反田・川子地区墓地群 八反田遺跡』高岡町埋蔵文化財調査報告書第35集 高岡町教育委員会
- 柳田晴子 2004『中山遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第93集 宮崎県埋蔵文化財センター
- 高岡町史編さん委員会 1987『高岡町史』（上巻）高岡町

### 第3節 第32地点の調査

#### 1. 調査の概要

第32地点は、高岡町飯田383番地に位置する。高岡麓遺跡は、天ヶ城の麓に広がる微高地上に形成されるが、第32地点はその東端付近に位置しており、明治初期に描かれた高岡の麓見取り図でも最も東側の武家屋敷にある。旧国道10号線を挟んだ南側には、高岡郵便局庁舎新築に伴い宮崎県教育委員会により発掘調査が行われ、古墳時代の竪穴建物から多量の土師器が出土したほか、古代、中世、近世にかけての遺構・遺物が出土した高岡麓遺跡第5地点が所在する。

第32地点は民家の庭にある。調査は民家の裏側から重機を入れ、表土及び造成土を北側に移動した後、人力で包含層を掘削すると共に遺構の検出を行った。地山、埋土共に粘質土を基調とするため、調査中は梅雨や湧水により度々水没に遭いながら、8月8日に調査終了した。

#### 2. 基本土層

本遺跡における土層堆積は、以下の5層に分層が可能である。

I層：表土である。粘質土を基調としているため、土は硬くしまっており、粘性に富む。元が庭であったために、植物や木の根が密に入り込む。層中には瓦片やガラス、石油製品、鉄製品など、現代の生活と共に生じた廃棄物が多く混入する。

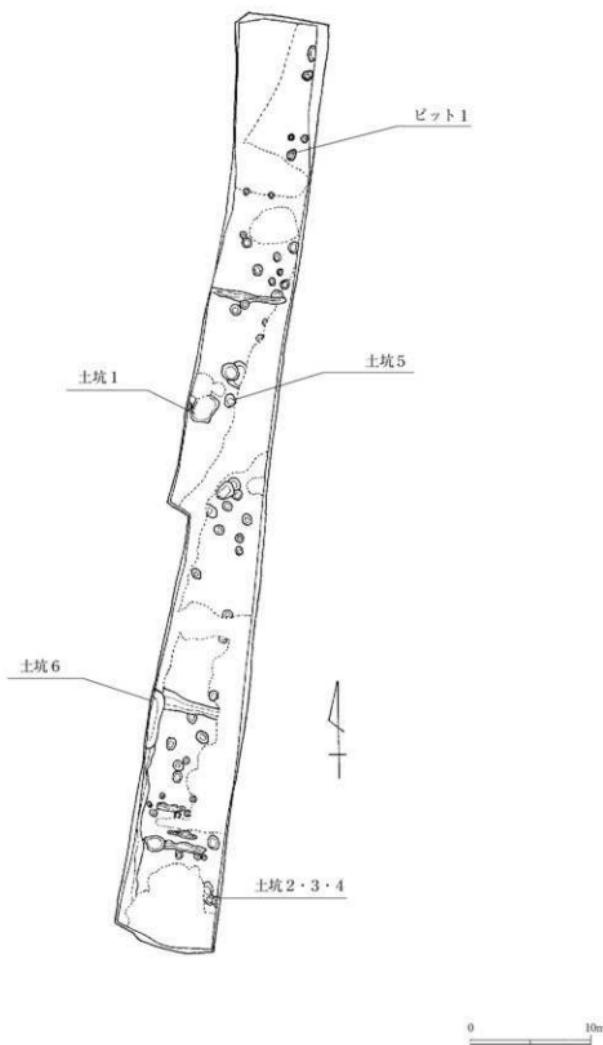
II層：造成土である。粘質土を基調としているため、土は硬くしまっており、粘性に富む。調査区中央で約30cmの堆積が認められ、南北へ向かうにつれ堆積は40～50cmと厚さを増す。層中には、ガラスや銅線、石油製品等も含まれるが、中には古代の土師器や近世の陶磁器が混入する。このことから、近代以降に、調査区周辺の嵩上げを目的とした造成が行われた際の土と考えられる。

III層：遺物包含層である。粘質土を基調とするため、土は硬くしまっており、粘性に富む。混入する遺物は土師器に限られることから、古代～中世に堆積したと考えられる。しかし、層の堆積は安定しておらず、堆積の厚さはおおむね10cm程度であり、調査区中央部をはじめとして消失部もみられた。また、層中の出土遺物はいずれも小片であり、表面は著しく摩滅しているもののが多かった。

IV層：地山である。黄褐色の粘質土を基調としている。土は硬くしまっており、粘性に富む。堆積の厚さは約30cmである。層の上面は本調査地点における遺構検出面である。

V層：地山である。灰褐色の砂質土を基調とする。土は硬く締まっており、粘性はあるがIV層ほどではない。IV層とV層の境界付近は降雨時における湧水が激しい。なお、これより下位の堆積層は確認できなかった。

土層堆積は、隣接する第5地点と似た状況である。特に地山は第32地点のIV層と第5地点のV・VI層が、第32地点のV層と第5地点のVI層がそれぞれ対応していると考えられる。しかし、第5地点では造成土中に炭化物の広がりが確認された一方、第32地点ではそうした状況は確認できず、代わりに造成土の厚さが第5地点の倍以上に及んでいた。また、第5地点で確認された古代から中世にあたる遺物包含層の堆積は、第32地点ではごく僅かであるなど、隣接しながら異なる状況も見られた。



第21図 第32地点遺構分布図

### 3. 検出遺構

検出された遺構は土坑とピットである。ここでは、主要な遺構のみ、図示して説明を行いたい。

#### 土坑

##### 土坑1（第22図）

遺構 長軸210cm、短軸150cmの、やや歪な方形を呈する。深さは60cmである。遺構は近世以降の搅乱に一部切られた状態であり、検出の際も遺物包含層の掘削後に確認された。

遺物 埋土からは、土師器の壺1が出土した。

##### 土坑2・3・4（第22図）

遺構 調査区北部において、3基切り合って検出された。土坑2は長軸100cm、短軸100cm、土坑3は長軸100cm、土坑4は長軸110cm、短軸100cmであり、いずれもやや歪な楕円形を呈し、底面は平坦面を持つ。切り合いから、土坑2が最も古く、埋没後に土坑3・4が構築されている。3基の規模がほぼ同じであること、埋土から炭化物が共通して検出されていることから、同一の用途として構築されたと考えられる。

遺物 遺物は確認されなかった。

##### 土坑5（第23図）

遺構 長軸60cm、短軸50cmの、やや歪な楕円形を呈する。深さは最深部で35cmである。

遺物 遺物の出土は、遺構のテラス部分より、破片が散在した形で出土した。2・3は土師器の甕である。いずれも非常に薄手であり、口縁部は内外面とも精緻なナデが行われている。古墳時代まで遡ると考えられる。

##### 土坑6（第23図）

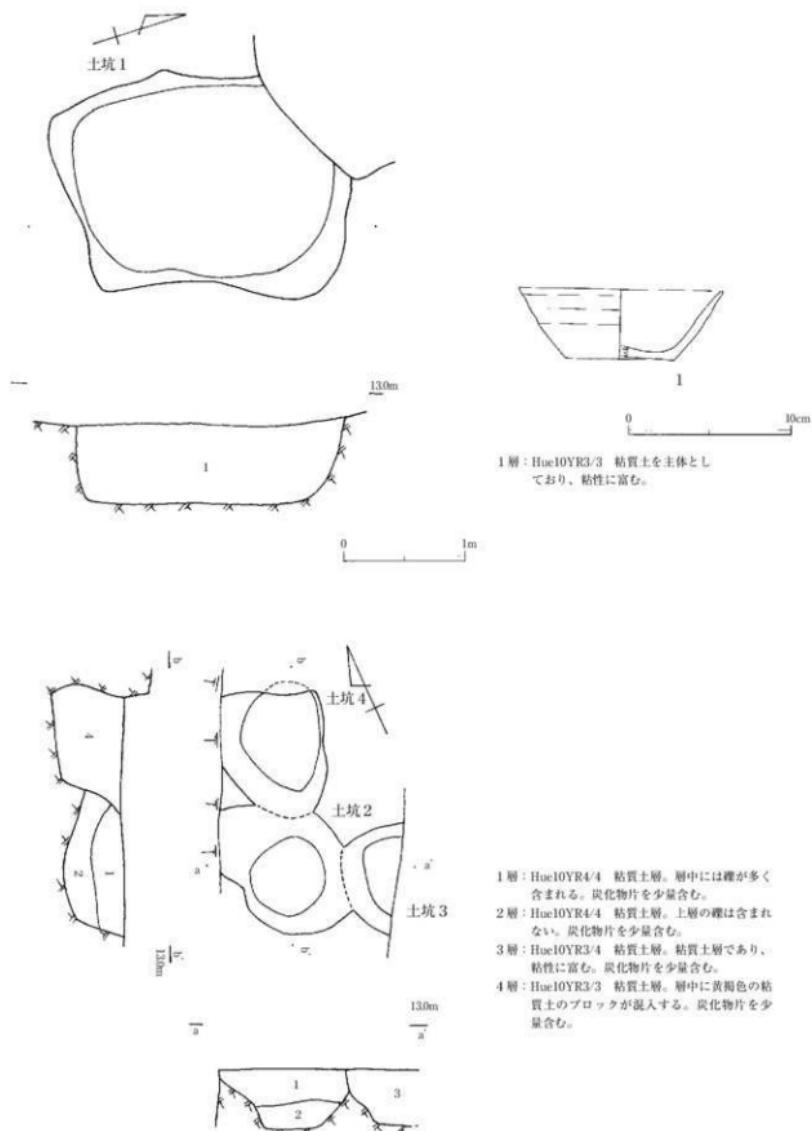
遺構 調査区の端部にかかるおり、うち一辺が390cmであること、また調査区内での深さが検出面より70cm下がることは判明しているが、平面形及びその規模は不明である。

特筆すべきはその埋土である。床面直上には木炭を主体とする層が分厚く堆積していた。またその上位の堆積層も、砂質土や粘質土に鉄分の混入が認められた。埋土を通して鉄分が認められることや、層中には羽口や楕形鉄滓が多く出土することから、鍛冶、及びそれに類する行為がこの遺構及びその周囲で行われたと考えられる。木炭や鉄分を多く含んだ埋土は、造成土の堆積前に鍛冶場を廃棄する際、鍛冶場にあった炭や周囲の堆積層を集めて埋めたためと考えられる。

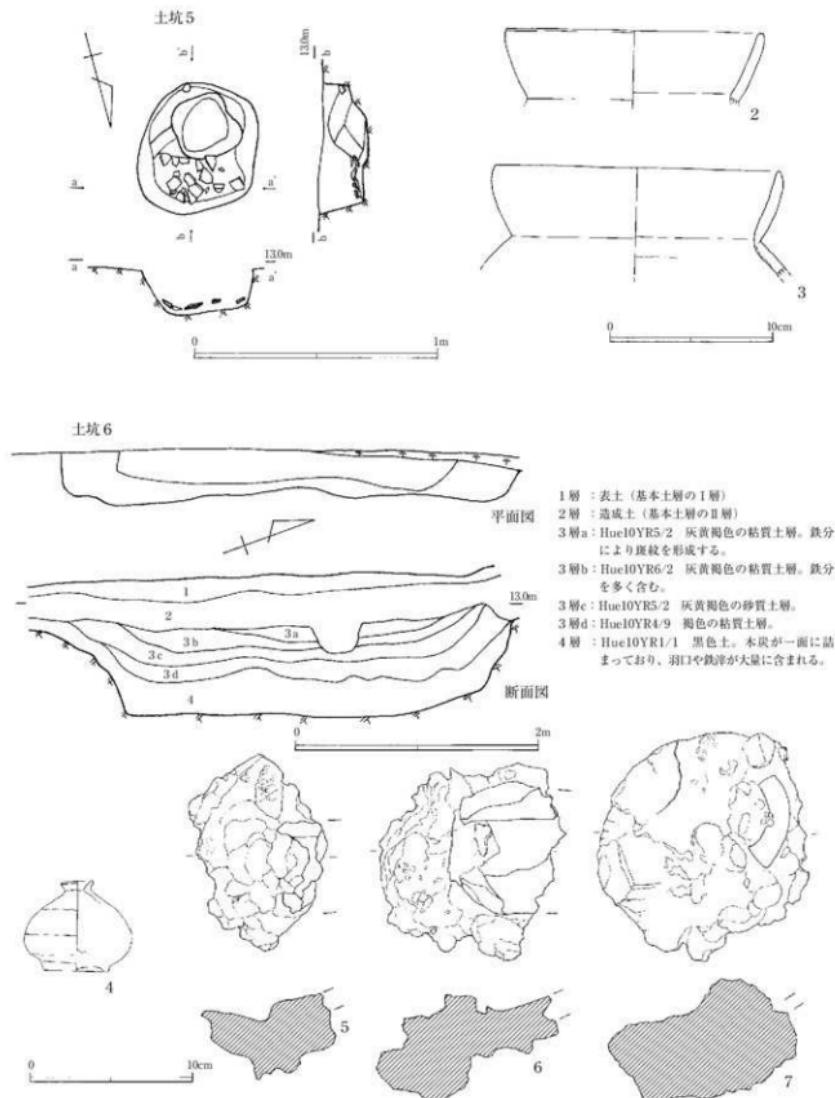
遺物 4は小壺である。5～8はフイゴ羽口付近で鉄が滞留したものであり、その形状から楕形鉄滓と呼ばれる。うち5・6・8はフイゴ羽口の尖端部が接着した状態である。融解した鉄滓に羽口が接着したまま冷え固まることにより、このような状態となったのであろう。7にもフイゴ羽口の痕跡が認められるほか、羽口から送られた風の影響により鉄滓が盛り上がった状態が断面で確認できる。9・10はフイゴ羽口である。いずれも端部は熱による融解の痕跡が認められる。なお、9の表面には、鋭利な工具により「れめ（ぬ？）」「る」等の文字が線刻されているが、その意図は不明である。

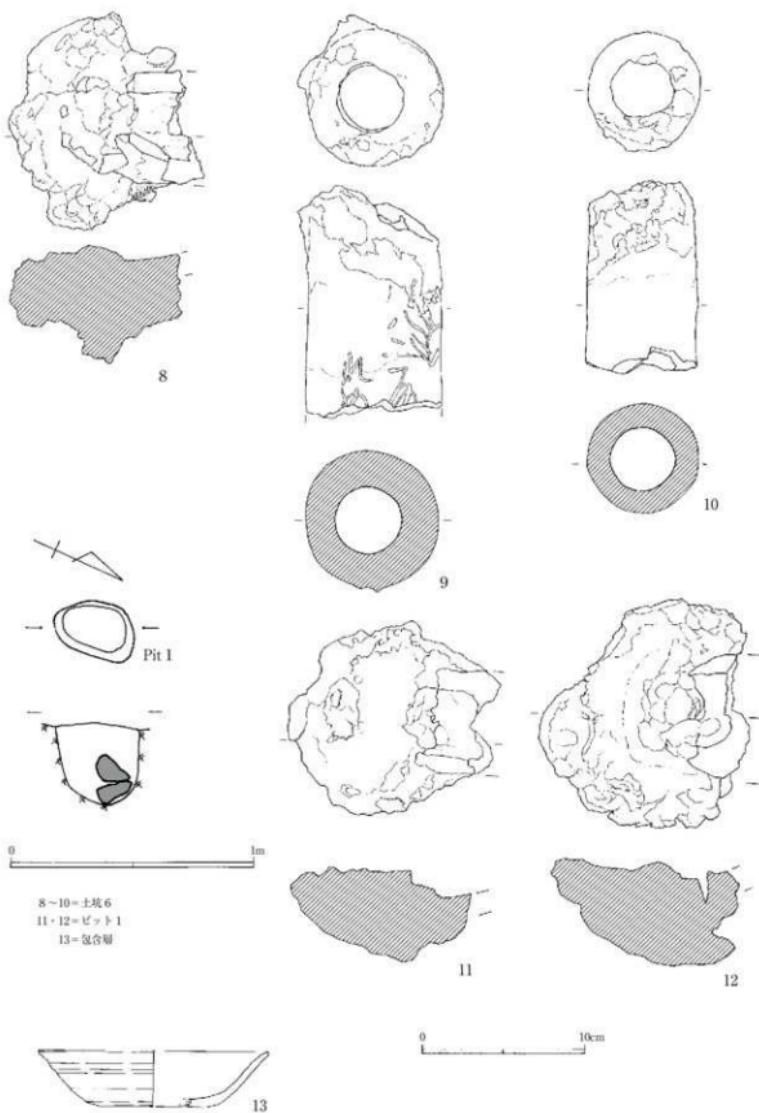
#### ピット

計44基検出された。分布は調査区中央部に集中している。多くは柱穴と考えられるが、その分布からプラン等を確認するには至らなかった。このうち、時期が推定可能な遺物が出土した



第22図 土坑及び土坑出土遺物実測図1





第24図 ピット及びピット・土坑・包含層出土遺物実測図

遺構は1基のみである。

#### ピット1（第24図）

遺構 長軸30cm、短軸20cmの、やや歪な楕円形を呈する。深さは35cmである。ピットとしては標準的な大きさだが、このピットからは楕形鉄滓が2点、ピット内に積み上げられた形で出土した。鉄滓をピット内に設置する目的としては、柱穴の根固め等が考えられる。なお、調査区内で検出を行ったピットのうち、根固めを持つものは他に検出されなかった。

遺物 11・12は、いずれも羽口が断片的に残る楕形鉄滓である。12は、7同様に盛り上がりが認められる。

### 4. 遺構外出土遺物

#### 包含層出土の遺物

包含層からの出土遺物は土師器が主体であったが、小片が僅かに出土する程度であり、図示可能な遺物は1点に留まった。

13は包含層出土の土師器壺である。古代の所産と考えられる。

#### 表土及び搅乱層出土の遺物

32地点の調査において出土した遺物の多くは、搅乱層・又は表土からの出土遺物である。搅乱は、区画や排水を目的とした溝や土取りが目的と考えられる。このうち調査区中央で確認された、調査区を斜めに横切る溝状の搅乱は、土質からⅡ層の造成時に埋没したと考えられるが、埋没に際して、古代の土師器から近代の陶磁器をはじめ、現代のガラスやビニールテープ等、多くのゴミの埋没を確認した。

14～18は土師器壺である。底部は糸切り底である15を除いて全てヘラ切りである。また19・20は高台があるため塊と分類したが、時期的には土師器壺と大差ないと考えられる。23・24は小杯として分類されたものであるが、23に比べ24は内湾気味となる。

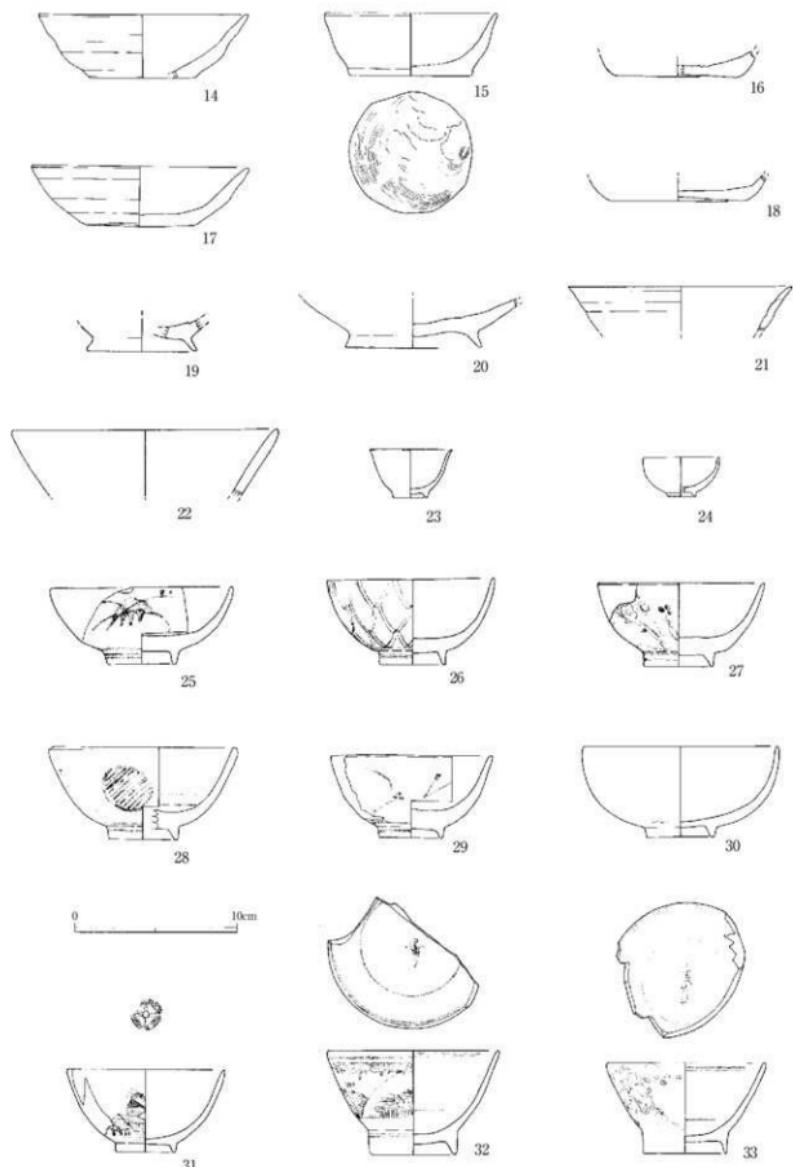
25～51は碗である。このうち、内面に蛇の目の釉剥ぎ跡が残る34は中国からの輸入陶磁器であり、時期も16世紀末～17世紀初めであるほか、39も中世末まで遡る可能性があるが、それ以外は総じて18世紀後半～19世紀の所産である。30は高台付近に小さく雁形文が描かれる。また32・33は広東形と言われる、高台が高く幅広で、胴部の膨らみが非常に弱い碗である。

41～43は、口縁部付近に緑色の釉薬がかかったものであり、19世紀前半、関西において製作されたものである。45・46は蓋と碗が一揃えとなったものである。外面にはいずれも駿馬の文様が描かれる。47は朱色による放射状の筆跡が残される。48は薄手であり、頸部の屈曲が著しい。内面には小さいながら胎土目が認められる。外面には青地に白く細い隆線によって弧状の文様が描かれる。49は筒型の茶碗である。器壁は肉厚であり重量がある。外面には菱形の区画が連続して描かれる。

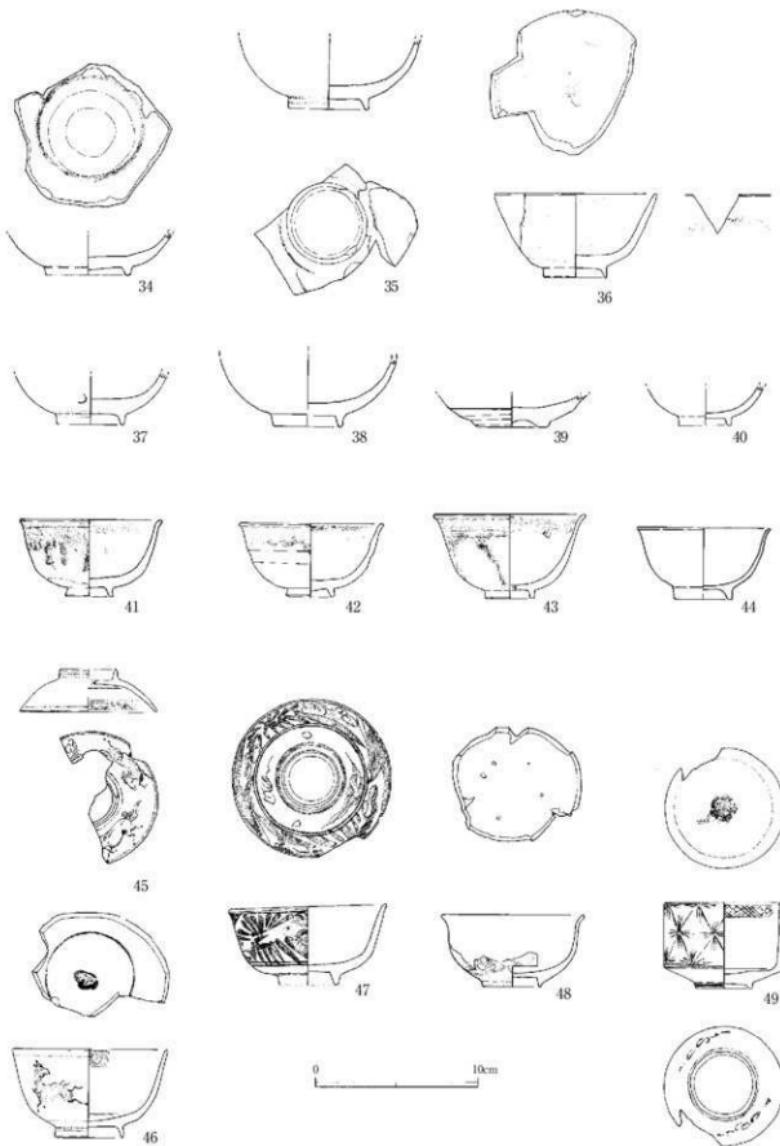
52・53は蓋である。碗とセットになっていたと考えられる。52は格子目が断片的に欠落しているが、焼成不良により、釉による文様が器面に十分残らなかつたと考えられる。

54～56は皿である。54は底面に兎の文様が描かれており、底面に蛇の目の釉剥ぎが残る。その内側には「化成年製」の文字を見ることができる。

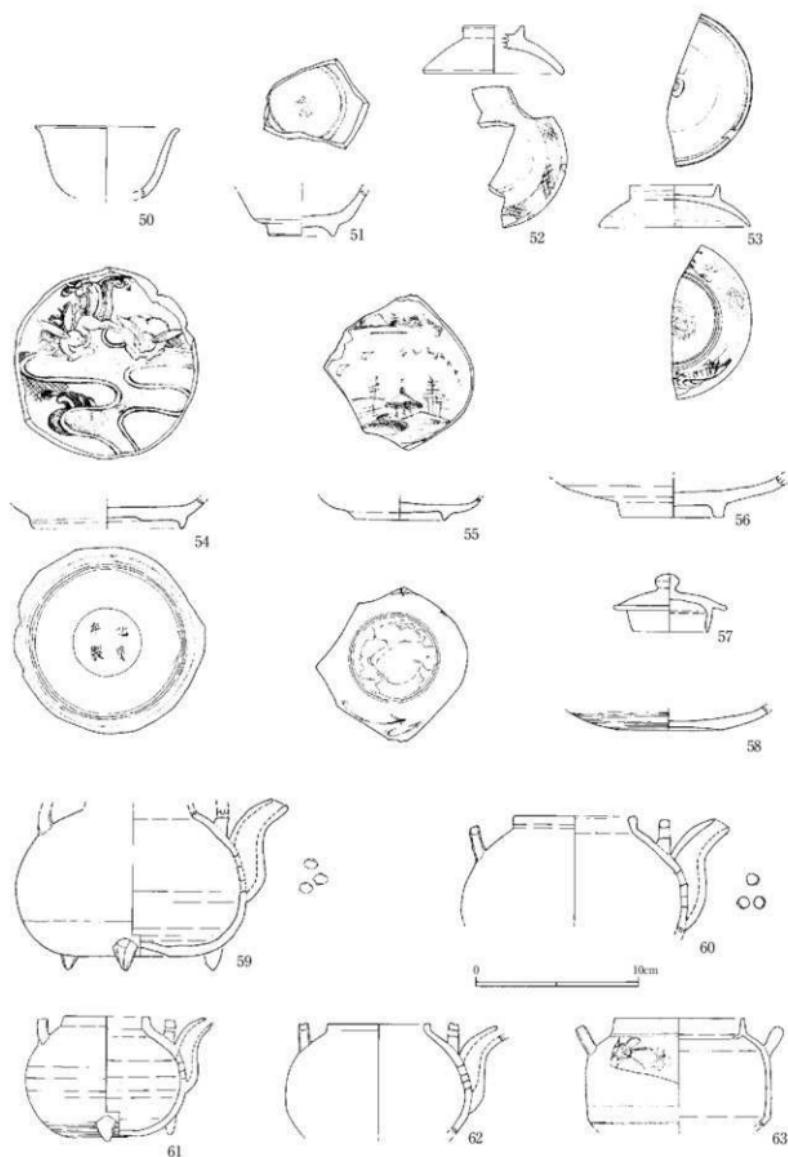
57～66は土瓶である。63・65を除いて薩摩、もしくは南九州で作られたものであり、この



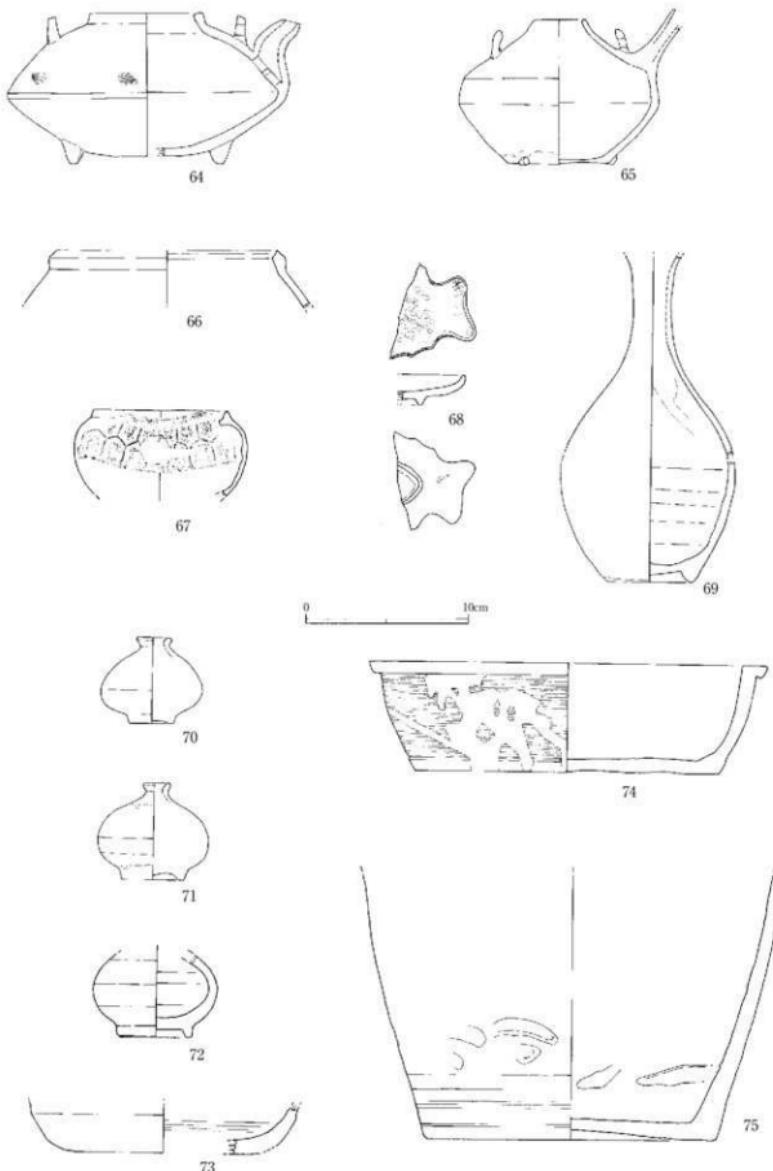
第25図 遺構外出土遺物実測図 1



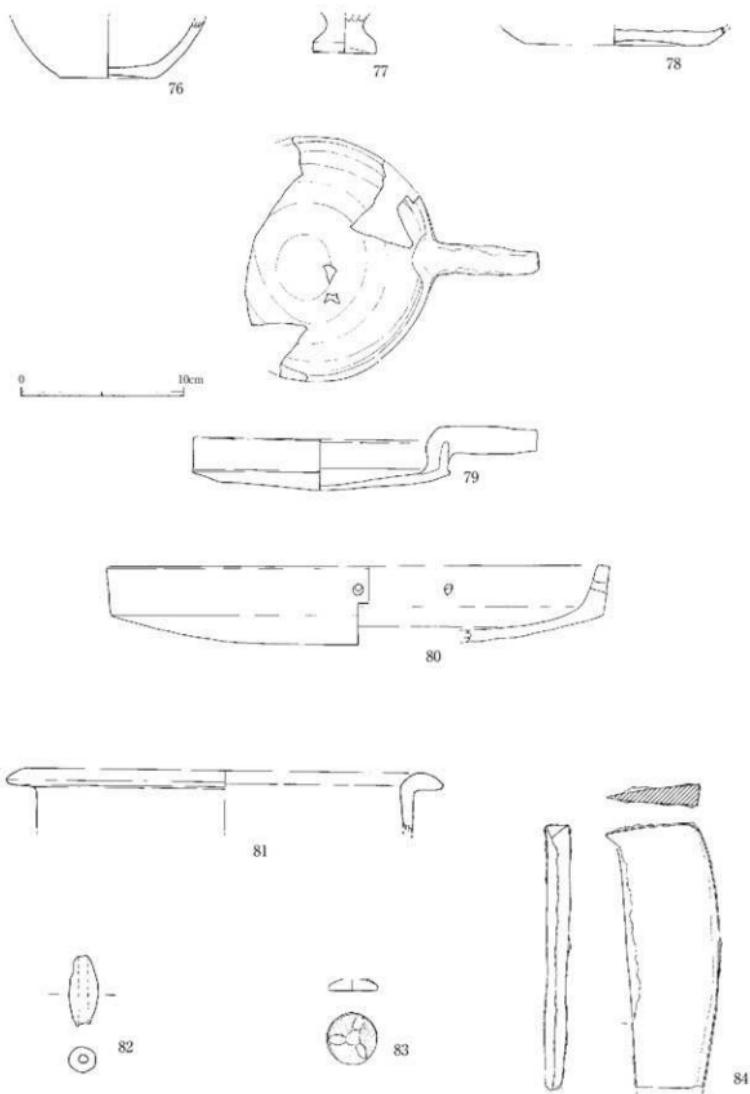
第26図 遺構外出土遺物実測図2



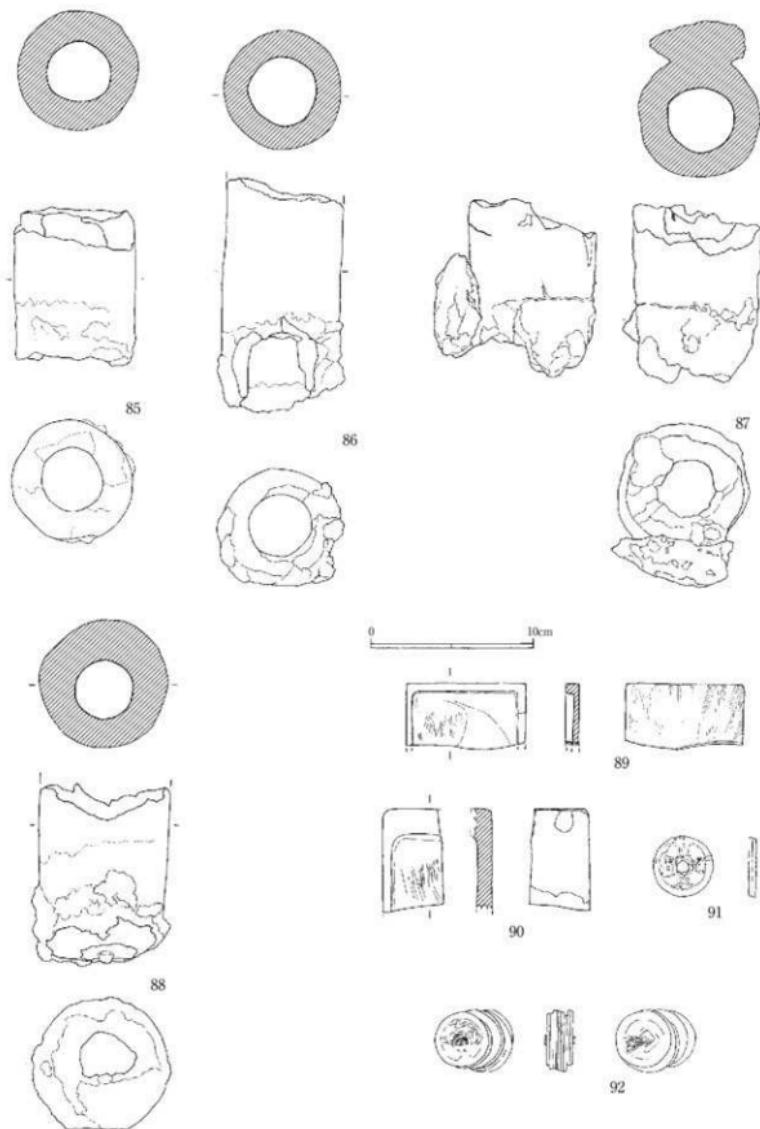
第27図 遺構外出土遺物実測図 3



第28図 遺構外出土遺物実測図 4



第29図 遺構外出土遺物実測図 5



第30図 遺構外出土遺物実測図 6

第4表 第32地点出土遺物観察表1

図番号	出土位置	種別	器種	法量			時期	产地	備考
				(1)	(2)	(3)			
1	土坑1	土師器	壺	(129)	(6.8)	42	古代	—	
2	土坑5	土師器	壺	(16.0)	—	—	古墳時代	—	
3	土坑5	土師器	壺	(16.9)	—	—	古墳時代	—	
4	土坑6	陶器	小壺	1.9	4.0	5.3	18c～19c前半	薩摩	
5	土坑6	鉄洋		8.0	12.3	5.3	近世～近代	—	
6	土坑6	鉄洋		11.6	12.1	6.9	近世～近代	—	
7	土坑6	鉄洋		13.0	14.4	8.0	近世～近代	—	
8	土坑6	鉄洋		9.0	11.0	6.0	近世～近代	—	
9	土坑6	土製品	羽口	(11.7)	7.0	7.0	近世～近代	—	
10	土坑6	土製品	羽口	(9.7)	—	5.6	近世～近代	—	
11	ピット1	鉄洋		9.5	9.5	4.7	近世～近代	—	
12	ピット1	鉄洋		11.2	11.7	5.4	近世～近代	—	
13	包合層	土師器	壺	(14.7)	(7.8)	32	古代	—	
14	複乱	土師器	壺	(13.0)	(6.8)	4.0	古代	—	
15	複乱	土師器	壺	(10.9)	—	4.0	中世	—	系切り底
16	複乱	土師器	壺	8.0	(8.0)	—	古代	—	
17	複乱	土師器	壺	13.2	6.9	3.9	古代	—	
18	複乱	土師器	壺	8.4	(8.4)	—	古代	—	
19	複乱	土師器	壺	6.7	(6.7)	—	古代	—	
20	複乱	土師器	壺	8.3	(8.3)	—	古代	—	
21	複乱	土師器	壺or瓶	(13.9)	—	—	古代	—	
22	複乱	土師器	壺or瓶	(16.4)	—	—	古代	—	
23	複乱	陶器	小杯	5.0	20	3.0	17c後半～18c	薩摩	
24	複乱	陶器	小杯	4.9	1.8	2.4	18c後半～19c前半	関西系	
25	複乱	磁器	碗	(11.4)	4.2	4.8	18c後半	肥前・波佐見	
26	複乱	磁器	碗	10.4	4.1	5.2	18c後半	肥前	
27	複乱	磁器	碗	(10.2)	4.2	5.1	18c後	肥前・波佐見系	雪の梅樹文
28	複乱	磁器	碗	(11.5)	(4.2)	5.7	18c後半	肥前・波佐見系	
29	複乱	磁器	碗	(10.0)	3.9	5.2	18c後半	肥前	
30	複乱	磁器	碗	12.0	4.1	5.6	19c	薩摩	
31	複乱	磁器	碗	(9.9)	3.7	5.0	1780～19c前半	肥前	
32	複乱	磁器	碗	(10.8)	(5.2)	5.4	1780～19c前半	肥前	広東形
33	複乱	磁器	碗	9.9	5.2	5.7	19c前半	肥前	広東形
34	複乱	磁器	碗	—	5.4	—	16c中国青花～17c前半	中国・漳州	
35	複乱	磁器	碗	—	5.0	—	18c後半	肥前・波佐見系	
36	複乱	磁器	碗	(10.0)	4.0	5.2	1820～1860	肥前	端反形(粗製)
37	複乱	磁器	碗	—	(4.3)	—	18c後半	肥前・波佐見	
38	複乱	陶器	碗	—	(4.3)	—			
39	複乱	陶器	碗	—	(4.5)	—	1580～1610年代	肥前	胎土目有
40	複乱	陶器	小瓶	—	(3.3)	—	18c後半～19c前半	関西系	
41	複乱	陶器	碗	(8.9)	(3.0)	5.0	19c前半	関西	
42	複乱	陶器	碗	(9.1)	(3.0)	4.8	19c前半	関西	
43	複乱	陶器	碗	(9.4)	(3.0)	5.1	19c前半	関西	
44	複乱	白磁	碗	8.2	3.7	4.4	18c後半～19c前半	中国福建(磁化室)	底に粘土質、口はげ有
45	複乱	磁器	碗(蓋)	(3.7)	(8.6)	2.7	1820～19c前半	肥前	端反形
46	複乱	磁器	碗	(9.6)	4.3	5.4	1820～60	肥前	端反形
47	複乱	磁器	碗	9.7	3.6	5.0	19c後半	瀬戸美濃	
48	複乱	磁器	小瓶	(8.8)	3.7	4.8	19c	関西	胎土目有

法量は土器の場合、(1)、(2)、(3)がそれぞれ口径、底径、器高に、それ以外の遺物の場合がそれぞれ長さ、幅、厚さを示す。

( ) のついた数値は復元の値であることを示す。

第5表 第32地点出土遺物観察表2

図番号	出土位置	種別	器種	法量			時期	产地	備考
				(1)	(2)	(3)			
49	複数	磁器	白盤茶碗	7.4	3.6	5.6	1780～1800	肥前	コンニャク印判
50	複数	白磁	楕	9.1	—	—	19c前半	関西系	
51	複数	磁器	楕	—	4.0	—	18c後半	肥前	
52	複数	青磁	楕(蓋)	(3.8)	(8.8)	3.0	18c後半	肥前	焼成不良
53	複数	磁器	楕(蓋)	(5.6)	(9.6)	2.7	1780～19c前半	肥前	
54	複数	磁器	高台付皿	—	9.4	—	18c後半	有田	
55	複数	磁器	皿	—	5.7	—	18c末～19c前半	肥前	
56	複数	陶器	皿	—	4.8	(3.7)	19c	肥前	
57	複数	陶器	土瓶(蓋)	—	(6.3)	—		南九州	
58	複数	陶器	土瓶	—	6.6	—	18c後半～19c	南九州	
59	複数	陶器	土瓶	—	7.8	—	18c後半～19c前半	椎本・小岱	
60	複数	陶器	土瓶	7.6	—	—			
61	複数	陶器	土瓶	5.4	4.5	7.8	18c後～19c	南九州	
62	複数	陶器	土瓶	6.4	—	—	18c後半～19c	南九州	
63	複数	陶器	土瓶	(7.8)	—	—	19c	関西	
64	複数	陶器	土瓶	7.2	(5.0)	9.7	19c	南九州	貝日の跡・ソロバン型
65	複数	陶器	土瓶	(3.6)	(6.6)	9.2	19c	関西	
66	複数	陶器	土瓶	(13.8)	—	—	19c	南九州	
67	複数	陶器	急須類	(3.3)	—	—	18c頃	九州	南器・中国の影響
68	複数	磁器	小皿	—	—	2.0			
69	複数	白磁	瓶	—	5.3	—	18c	肥前・波佐見	
70	複数	陶器	小皿	0.7	4.0	6.2	18c後半～幕末	南九州	
71	複数	陶器	小皿	1.1	2.8	5.4	18c後半～幕末	南九州	
72	複数	青磁	小瓶	4.6	—	—	17c中～18c初頭	肥前	
73	複数	土師器	鉢	12.0	—	—			
74	複数	陶器	鉢	24.6	19.0	—	18c～19c	南九州	
75	複数	陶器	変更類	—	17.6	—	18c～19c	南九州	
76	複数	陶器	括鉢(小)	(6.2)	—	—	18c後半～19c	南九州	
77	複数	陶器	仏瓶器	—	4.0	—	17c中～後半	肥前	
78	複数	陶器	変更類	—	(11.4)	—	18c後半～19c	南九州	
79	複数	土師器	炻器	16.0	16.9	4.0	近世		
80	複数	土師器	炻器	32.6	32.2	4.8	近世		
81	複数	土師器	変更類	(25.2)	—	—			
82	複数	土製品	土躰	—	—	—			
83	複数	陶器	泥隠子?	—	3.0	—	18c～19c	—	
84	複数	鐵製品	範	—	6.5	0.7	—		
85	複数	土製品	羽目	—	7.4	7.6	近世～近代	—	
86	複数	土製品	羽目	—	6.9	7.2	近世～近代	—	
87	複数	土製品	羽目	—	7.6	9.6	近世～近代	—	
88	複数	土製品	羽目	—	8.0	8.0	近世～近代	—	
89	複数	石製品	楕	—	7.6	0.8	近世～近代	—	
90	複数	石製品	楕	—	—	—	近世～近代	—	
91	複数	銅鏡	寛永通宝	3.6	3.6	0.4	近世	—	
92	複数	銅鏡	寛永通宝	3.8	4.8	1.6	近世	—	

法量は土器の場合、(1)、(2)、(3)がそれぞれ口径、底径、器高に、それ以外の遺物の場合がそれぞれ長さ、幅、厚さを示す。

( ) のついた数値は復元の値であることを示す。

器種における在地性の高さがうかがえる。67は陶製の急須類である。口縁部付近を型で押しており、材質同様中国の影響がうかがえる。

69は肥前波佐見産の白磁の瓶である。また、70・71は小壺である。72は青磁の小瓶であり、小壺に比べて肉厚である。74は陶器の鉢、75は壺、もしくは甕である。

76は擂鉢であるが、小型であり薄手に作られている。77は仏飯具の脚部と考えられる。

79・80は焙烙である。縁部は直線的に立ち上がり、中央部には凹みが設けられている。79には把手がつけられているが、80では縁部の立ち上がりに穿孔があることから、吊るして火にかけられたものと考えられる。どちらも底面は火による劣化が著しい。

81は土師質の壺または甕である。口縁部は大きな外反が認められる。82は管状土錘である。83は用途不明の土製品である。ボタン状に粘土が成形されており、表面にはプロベラ状に三枚の粘土が貼り付けられるほか、前面に細い棒状の工具で押したような刺突を見ることができる。江戸時代に流行した泥面子に類似するものの、ドーム型を呈する形態が通常の泥面子とは異なるため、明言は避けたい。84は鉄製の鉈である。刃部は折損しているものの、全体の形状や、刃部尖端部の内厚な作り等、現代の鉈とはほぼ同一である。

85～88はフイゴ羽口である。端部には溶け出した鉄分の付着が認められるほか、87は椀形鉄滓へとつながる鉄の滞留物が付着する。

89・90は硯である。いずれも石を研磨して作出する。91・92は寛永通宝である。91は2枚、92は9枚が接着した状態である。92には通し糸も一部残されている。

## 5.まとめ

本調査地点は搅乱層が多く、遺構の検出が限られていたため、遺跡の性格を考える上で不明な部分が多い。第5地点では、古墳時代の堅穴建物をはじめとした遺構が確認され、多くの土師器が出土したが、近隣にあたる本調査区においては、その広がりを確認することはできなかつた。また、古代における遺物包含層の広がりは、第5地点ほど明確ではないが、本調査地点においても確認することができた。中世における遺物は陶磁器等が僅かに残される程度であり、その性格は不明の部分を多く残す。近世になると遺物の出土量が増加し、碗、土瓶、壺、甕などの日用道具ばかりではなく、産業に関する遺構も検出された。特に土坑6を中心多く出土したフイゴ羽口や鉄滓は、第5地点においても出土しており、調査区近辺で鍛冶が営まれたことが明らかとなった。本調査で出土した椀形鉄滓の表面には、鍛造剥片の付着も確認されていることから、鍛練鍛冶を主に行つたと考えられる。高岡郷では、江戸時代末期から明治時代初めにかけて、鍛冶を行う武家の存在が知られているが、今回の調査で、その存在がより具体的になったといえる。

### 参考文献

高岡町教育委員会 1997『宮崎県高岡麓の構成とその遺構調査報告書』高岡町教育委員会

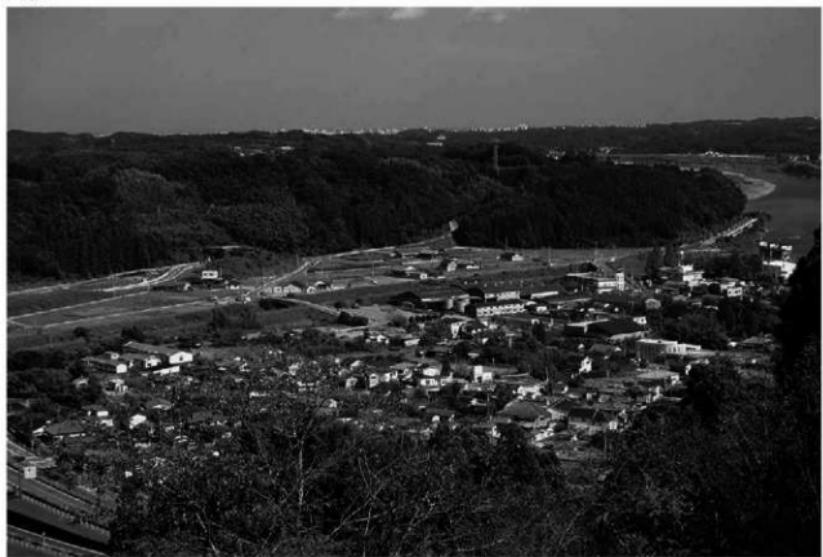
宮崎県教育委員会 1996『高岡麓遺跡』高岡郷便局宿新設工事に伴う発掘調査報告書 宮崎県教育委員会

# 写 真 図 版



高岡城跡遠景（天ヶ城から）

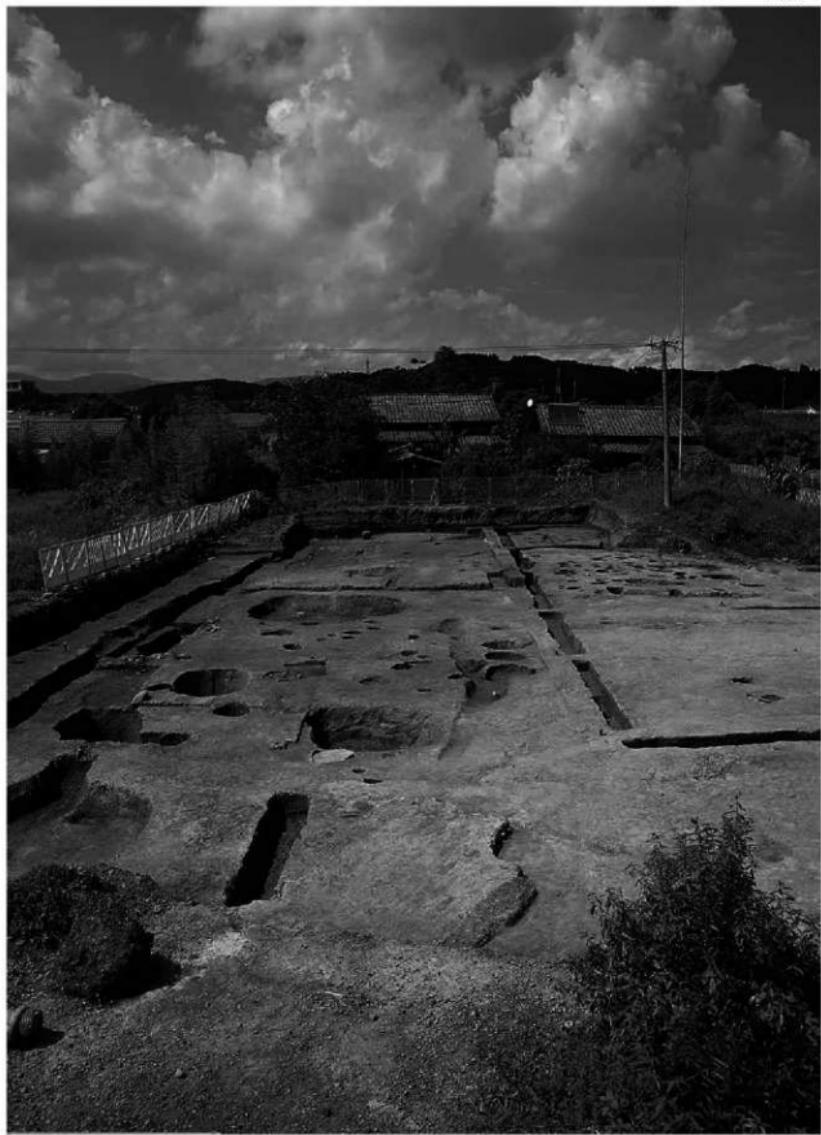
図版2



調査地遠景（北西から）

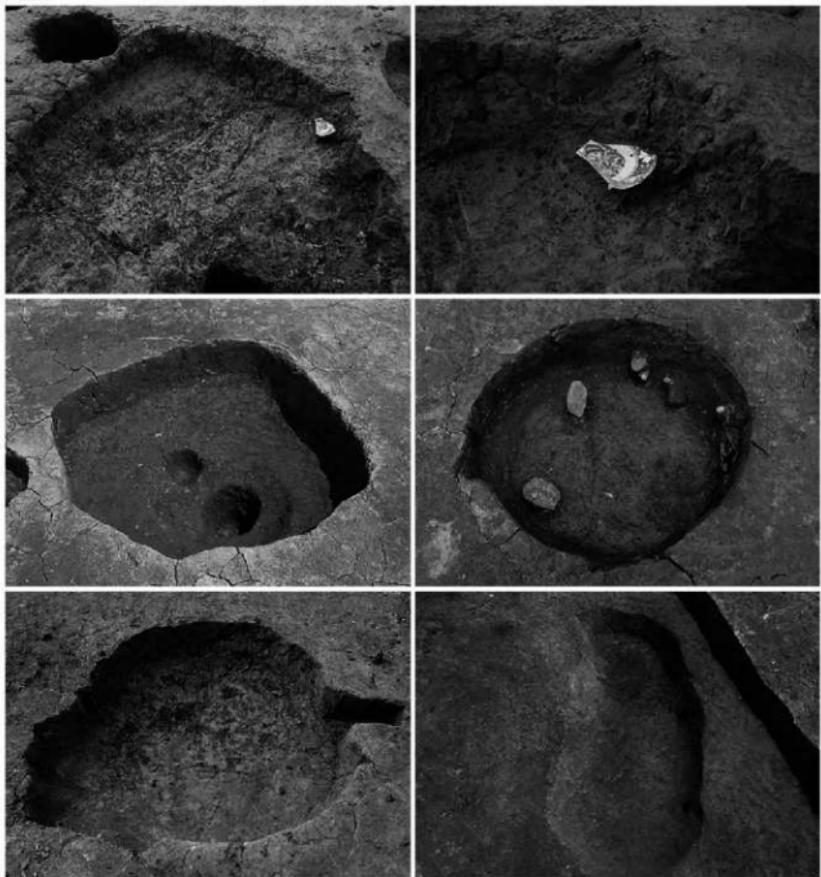


調査区全景（南東から）



調査区全景（南から）

図版4



上段左：土坑1遺物出土状況（南東から）、上段右：土坑1遺物出土状況詳細（南から）

中段左：土坑2完掘状況（南東から）、中段右：土坑3遺物出土状況（南から）

下段左：土坑5完掘状況（南から）、下段右：土坑6完掘状況（南から）



上段右：溝1完掘状況（南から）、上段左上：井戸（南西から）、上段左下：ピット集中部（南から）

下段：土坑1・3、溝1出土遺物（左から土坑3、溝1、土坑1）



第28地点遺構外出土陶磁器



左：第28地点遺構外出土遺物陶磁器以外の土器  
右：同出土遺物火打石



1. 石塔群検出状況（東から）



2. 調査終了時調査区全景（南から）

図版8



1. 石塔群4検出状況（南から）



2. 石塔群5半截（東から）



4. 五輪塔・板碑

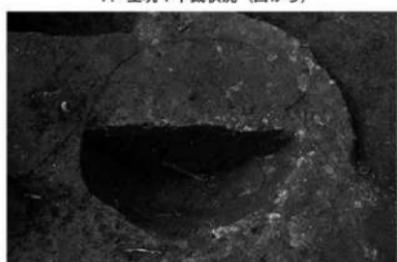
3. 造成土内出土土器



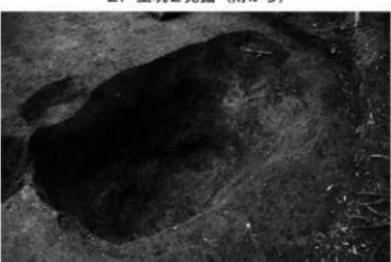
1. 土坑 1 半裁状況（西から）



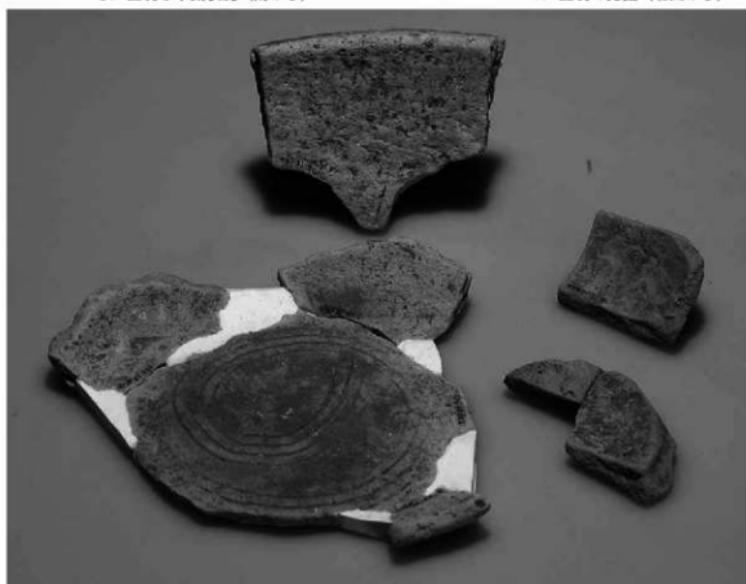
2. 土坑 2 完掘（南から）



3. 土坑 3 半裁状況（南から）

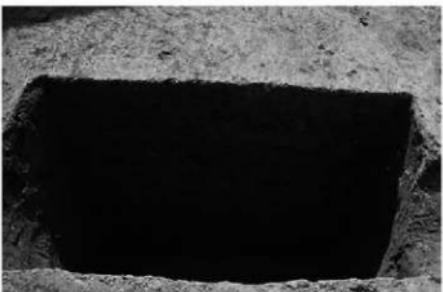


4. 土坑 4 完掘（北西から）



5. 土坑 1 出土遺物

図版10



2. 墓穴1半裁（東から）



3. 墓穴1箱状痕跡完掘（南西から）



左列上から

1. 墓石1（南から）
4. 箱状痕跡内銭貨出土状況（東から）
5. 墓穴1出土遺物



上： 1. 墓石2（南から）

右上： 2. 墓穴2箱状痕跡完掘（南東から）

右： 3. 墓穴2完掘

下： 4. 底板検出状況





上：1. 墓穴3（西から）  
中：2. 墓穴2・3出土遺物  
下：3. その他遺構・遺構外出土遺物

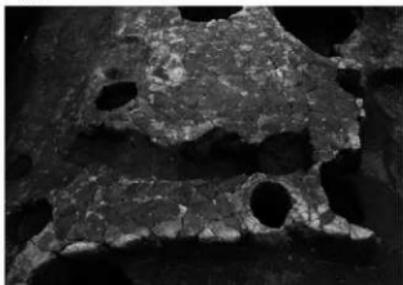


遺構掘削状況（北西から）



遺構内遺物出土状況（西から）

図版14



遺構完掘状況（西から）



遺構完掘状況（東から）



遺構完掘状況（南から）



遺構完掘状況（北から）



出土遗物（小壺）



出土遗物（土瓶）



出土遺物（羽口）



出土遺物（楔形鉄滓）

## 報 告 書 抄 錄

宮崎市文化財調査報告書 第90集  
高岡麓遺跡第28・31・32地点

飯田地区土地区画整理事業に伴う文化財発掘調査報告書

2012年3月  
発行 宮崎市教育委員会